

# 中国民族住宅研究報告

A study on the Ethnic Styles of the Dwelling Houses in China

持田 照夫

Teruo Mochida

## 序章 問題と仮説

■問題は何か ●根本にある問題は ◆一つには日本住宅のプロトタイプがもっている“特徴点の型”はどんなものか、またこれは外国に対しても特徴点と主唱して言えるのか、日本だけが孤立して持っていて比べられないのではないか、世界に通用するような普遍性はないのではないか等の疑問に答えなければならないということである。

上の問題中、後半の普遍性（日本住宅型の住宅構成空間の類の存在）の証明は後出の ●もう一つの問題（文化型としての相似住宅型〔アルタイの帯〕の存在の問題）の解明のところに譲るとして、その前に日本住宅の住宅構成空間の型の特徴点を明らかにして置かねばならない。この“特徴点の型”について、筆者はこれまでの日本住宅の先人の研究・筆者自身の研究により、次のように考えている。

○日本住宅構成空間の性質

●ハード面：日本住宅の構成空間はまず床の種類によって次のように分けられる。

〔空間〕	〔土間〕	〔土座〕	〔床上座〕
（床材料） （床仕様）	（自然材・少加工材） （土・タタキ）	（粗加工材・粗質材） （粃殻・ゴザ・板・籐）	（精加工材・上質材） （各種座・畳・布）

・この空間の意味づけは、主に内立面の仕様・それに天井と床の仕様が重ねられて行われる。下に、その内立面・天井の仕様を載せる。上を併せて見ていただきたい。

〔床種別空間〕	〔土間〕	〔土座〕	〔床上座〕
（立面仕様）	（土壁・大戸・障子戸・板戸）	（板戸・帯戸・袋戸）	（床・棚・襖・欄間）
（天井仕様）	（吹き抜き・梁現わし）	（吹き抜き・梁現わし・梁化粧天井）	（竿縁天井・化粧天井）

・全体として中心軸がなく左右対称でない。

●ソフト面：坐式生活を基本とし、接客・供食・客寝空間は同一空間（床上座）を使用するが、ふだんは家族もこの部屋を使用する。

：空間・坐空間に方向性（上下・表裏）や定位性（ヨコザ、キヤクザ、カカザ等）がある。が、これは格式性とは異なる。

・空間は機能によって分けられず、融通的な使用をする。形態は必ずしも機能に従わない。

平成3年8月25日原稿受理

大阪産業大学 工学部

- ・旧型部分（床上部分）の頑固な自己形態維持の傾向がある＝近代的発展は旧部分を残し（＝不変部分）、土間・続棟・付加棟・2階・別棟等を近代化させる（可変部分）方向をとる。つまり、日本住宅の空間構成は、全体が近代化し全部が近代化部分で占められるのではなく、旧部分は基本的に変化せず、新たに加えられた部分を自己流にいわゆる近代的に変化させて、その新旧2つの部分をあわせて持つ形でできている、ということである。

以上をより具体的に言えば、日本住宅はザシキ的空間・ザシキ的使用を残す住宅であり、イスーベッド・椅子坐様式の西欧の住居様式とはハード面でもソフト面でも異なるものであるということである。しかもその根は歴史的にもまた習慣的・心理的にも深いものがあると考えられるが、このような住宅把握に対し批判と時には激しい攻撃が行われて来た。

この攻撃は例えば、ザシキ等は日本の古い生活体制の産物で世界に例がなく普遍性はない、近代化の日本では直ちに破棄されるべきものであるという類のもので、これが建築学界在来一部の強い意見であった。が、これに対し果してそうなのか、“それらは存在すべき理由がある”のではないかと、という疑問が沸いて来た。また、何處か他の地方にそれと同様のものがありその存在意義を証明するものがあるのではないかと議論も起こって来た。ザシキ等に対する“存在無価値論”“古臭い封建的遺制物論”等の激しい攻撃に直面し、民家研究者や住宅研究者等が上に述べた「ザシキ“存在有価値論”」「外国での“有証拠実在論”」を立ててその立証を構想したとしても、ことの流れから見てそれは十分に自然の理のあるものと考えることができよう。

では、上に述べた“他の地方”とは何處のことを言うのか。これには以前から、北方説・南方説・中国大陸説・アイヌ説・その他の地域説等いろいろのものがあった。今回はこれを、住居建築以外の他の文化的特徴をも勘案し、大陸それも漢族の北に住する諸民族に求めたのである。これらの諸民族は、夙に言語学では日本との類似性が指摘されている。併し、それらの諸民族は、言語ばかりでなく被服や立ち居振る舞い、嗜好や心性、音楽や絵画等も似ていると言われる。この点、住宅はどうなのか。住宅も似ているのか。併し、住宅の何が似ているというのか。これらのことを知りたい。ただこの“似る”という言葉も、単なる常識的な内容＝構造素材や形態上の根原型的相似として理解するのであれば、本研究の意義は無いも同然であろう。

大陸の住宅に関しては、戦前・戦後にかけて希少なならざる研究がある。戦前の昭和10年代における朝鮮族についての今和次郎氏の研究や満族（元は満州族と言った）についての村田治郎氏の研究、それに戦後昭和50年代からの青木正夫氏の漢族の研究その他である。これらの研究特に前2者は、建築の研究を越え生活採集的研究にまで及んでいるので、当時としては進んだ研究であった。が、どの学問にもある初期の形態学的・博物採集学的追究の範囲という性格を免れず、後者の場合は戦後の研究故機能主義を検した進んだ形態を採っているとしても、機能に重きを置いたため意味を疎外した限定的生活機能への形態対応の、従って形態密着的な研究になっており、空間問題を心理の奥深くにまでいたって検討するということが出来ないと思われるのである。このため住宅空間（様式）における日支同文か異文かの問題を特定できないでいるし、民族的居住空間概念が把握できないでいる。この研究は学問の世界では近代計画学の代表的な研究と見なされているようであるが、もしそうならばこ

のにより近代計画学の限界が見えるとも考えられるのである。

これらの研究に関連してより大事なことを述べるならば、前者・後者ともに戦前・戦後の1世紀に近い時間を費やして培養されて来た日本<sup>1</sup>や西欧<sup>2</sup>における文化に関する諸研究を、一部は取り入れたとしても、大部はこれを取り入れずになされた研究であり、ましてそれを消化した形での方法を提出しているわけではないので、文化の深いところまで到達して説明することが出来ていると認めがたいものである。日本の住宅研究がこのような経過・背景をもっているという事情を弁えた上で、本研究が新たな追究を進めようとするものであるとすれば、それは上述の西欧の諸説・日本の諸説をも消化した形でとり入れた後、その上に自己の発明性を加味した形での論理のスキームを文化評価尺度として持ち、より根底のところでは日本と大陸諸地域の住宅の特徴点の同異を刷り出し示すものでなければならない、ということになろう。では、その根底とは何かというと、それは形の相似に止まらないより深いもの、つまり“文化的相似”ということになろう。これにも多くの事項が考えられるが、ただ注意すべきは、昔から言い古された金科玉条や文化の形のみで判断しないということである。例えば、“日支同文”“アジアは一つ”“世界どこでも生活の進化の形は一つ”等の概念を金科玉条として出発した場合、初めから根本的に間違えてしまう危険がある。また、木造や瓦等の物・形で判断すれば、それも本質的な齟齬を来す危険がある。が、住宅の学問の世界では、この金科玉条・先入観・危険の多い考え方で研究が行なわれている場合が意外に多い。

翻って、上に述べたものとは少々異なるもので研究が進められる可能性について示そう。それは形でなく形で見るのであるが、前述の“機能的な形”でなく、“文化に関わるもの”或いは“文化に関わること”としての形で見るのである。例えば、“ザシキ”によって見れば如何。これは単なる空間(=形)ではなく“意味のある空間”(=形)であるので、問題は違って見えて来る筈である。これはやがて、ザシキを使って行われる或る種の生活行為の相違・相似の問題に、更にその生活のやり方・考え方の相違・相似の問題に、更にその様式の相違・相似の問題に広がって行く。その他の問題、床の“しつらえ方”や“使い方”、床上の“座の取り方”や“壁の飾り方”等も「文化の問題」として扱えたとき、その意味が明らかになる。これらを明らかにすることが、そしてそれらが或る意味で日本のものと同質であるものがあることが明らかにされる場合、日本の“文化”“住宅”“居住様式”等は〈孤立〉しているのではなく、世界の中で通用する特徴点をもっており、その同質者が多い場合日本のそれらは世界の中で多くの同類をもつものであることが証明される。

●根本にある問題の ◆もう一つは、日本の住宅の形に相似の住宅の近隣型は具体的には、日本(大和)―韓国・北朝鮮(朝鮮)―中国東北(満)―中国北部(蒙)―中国西部(維〔維吾爾=ウィーグル/トルコ族の一派〕)の帯、つまり日―鮮―満―蒙―維(土)の帯として連なっているかも知れないということである。しかもその帯は、住宅以外の文化的特色も相似な「文化の帯」と考えられるということである。

これは、住宅を文化の現れの一つと見たことによる判断から来ている。一般に、文化現象の根底に『言語』があるとされており、世界の言語は一応その学界における親疎の規準があり、それによって分類分けされている。このやり方で日本語も分類分けされているが、膠着語・音韻対応規則・祖語の‘ら行’不使用等の諸特徴点の指摘で、上記の帯の地域にくくられている。これをこの学界では“アルタイ系”の言語と呼ぶが、この学問の世界では久しくこの

ように定義付けられていた。しかし、現在ではこれに異論<sup>3</sup>も出ている。本研究は、文化それも深層（文化の深層）からする新しい文化の研究を目指すものであり、そして結果として“日本文化アルタイ系論”の可能性を提唱するきっかけになるかも知れないものでもある。ただ、これは言語＝文化基礎論の立場と異なることを断っておこう。逆に、言語の底に潜む文化＝言語感情（文学にも通じるもの）を基底にした研究で、この基底の物に感ずる感じ方<sup>4</sup>・その表現のし方がその他の生活事情にも潜在しており、衣・食・住の文化の現象の形で出て来ると見るのである。つまり、料理や被服や住居も言語の一種であるとするのである。このところが他の研究と異なっており、私の研究の特徴ともなっていると考えているものである。

以上述べたように《住宅は一つの文化現象》という立場を採る場合、文化から住宅を見るのではなく、住宅から逆にこの地域の文化の相似性を測ることが出来はせぬかということが考えられる。文化学の学問の世界では、これまで言語学がヘッダーつまり案内人であった。しかし上の事情により、住宅学が、というよりも住宅文化学（更に正しくは〔生活文化学〕、習慣・習性等も含む）がもう一つの案内人になって追究することが出来はせぬかということである。この方向は、文化科学の中ではこれまでになかったことであり、画期的なことと考えられる。もし、このような含み（含意）で形の追究がなされ、それによりこの帯の住宅・生活に近縁の関係があるという結果が立証されるとするならば、それは即ち住宅文化についても帯があると考えてもよいと言えるのではあるまいか。そして、この帯の外の文化がこれと異質の性質を示すということが何らかの方法で立証されるならば、上述した言語の上で近縁の関係にあるものは、文化（住宅）の上でも“アルタイ”の線の上にあると考えてもよいのではあるまいか。このことは逆説的に、言語とはまた違った言語を超えた場面で、文化の他の側面（住宅→生活）の“アルタイ”系を証明することになるのであるとも考えられる。

●因みに、住宅はその表示の中に ◆“言語性”“広い意味の言語”の性質をもっている。このことについては、既に1978年に拙稿の論文<sup>5</sup>がありそこで触れているが、これを筆者は「住宅の‘ランゲージ性’」と呼ぶことにした。この、住宅が“ランゲージ性”を持つことの仮説は、日本でまた他の国で検証されることが要請されるが、この中国での検証も、今回の中国住宅の研究の目的の一つになっている。日本ではこのことは、建築計画学（そのうち特に住宅学・住居学）が民家学・民俗学と結び付けられることによってかなり明らかになって来ている。が、今度の中国行きにより中国に関してこのことを部分的であれかなり鮮明に証明出来る可能性が出て来ている。もし、このことが証明出来るならば、この課題（住居の“ランゲージ性”）は重証的に証明されることになる。

■仮説は何か ●ここでこれまで述べて来た仮説をまとめれば次のようになる。

- i) 日本住宅の形と言われるものは型ではないとも言われるが一つの型と認めてよいか
- ii) 外国に日本住宅の型の類型は存在するか
- iii) 日本—朝鮮—満州—蒙古—新疆の住宅・生活の文化的特徴は相似か
- iv) これを言語とは別な観点から見た文化的帯“アルタイ系”と言えるか
- v) 日本住宅の諸特徴は文化の型としては孤立せず一般的普遍的であるか
- vi) 日本住宅はその存立に意義があり近代化の為に滅ぼしてはならず保存すべきものか
- vii) 住宅は“ランゲージ性”を持つと言えるか

これらを完全には言わないまでも、少なくとも幾分かは前進させ、部分的でよいからより鮮明に証したい。

(注)<sup>1</sup>：日本では柳田国男氏・折口信夫氏や原田敏明氏・福田アジオ氏等の諸論。

(注)<sup>2</sup>：西欧ではマルセル・モース、レヴィ＝ストロース等をはじめとする幾多の西欧文明対他文明の等価値論者の論。

(注)<sup>3</sup>：“日本語はアルタイ系に入る”とする説と、“入らない”とする説がある。

(注)<sup>4</sup>：この問題は突き詰めれば“或る人間集団の‘味’‘味わい’‘嗜好性’”つまり“或る民族の‘味’‘味わい’‘嗜好性’の問題”ということになろう。

(注)<sup>5</sup>：「対馬のヒロマ型住宅の研究（農村住宅の生活構造論的研究その14）」—空間構成の意味の解明—持田照夫 日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）昭和53年10月 p.59～60、この中で“広い意味の《言語》”特に住居空間形態の言語性について言及している。

#### 仮説構築のための参考資料

○準備ノート 以下に、上に到達する途上で準備的に考えたことを要約して掲げる

##### ・本研究に取り組む問題意識

何故この仮説を立てたか、その背景にあるもの

##### i これまでの諸説に対する疑問（日本・中国の同文性等）

何故“日支同文”なのか、“アジアは一つ”なのか・→これらは大疑問  
これを“習性”、家作り方の習性・使い方の習性で見ると今度の研究

##### ii 日本人の西域志向（西域に思いをはせる日本人）

何故“西域”なのか、何故“華中”でないのか・→文化伝達の飛び越え  
その真意を今度の調査で探る

##### iii 血の問題（民族の嗜好性）

何故“和魂漢才”なのか、“漢魂”でないのか・→排易姓革命科挙宦官  
その差異を今度の接触で探る

##### ・日本文化を取り巻く環境認識のこれまでの潮流

##### i 諸学の方向

言語、文化様態、文化伝播、宗教、民族、民俗、風土・→欠住居・心理

##### ii 建築的とり上げ

建築様式、意匠様式・→“もの”として見る、欠“こと”＝文化の見方

##### iii 欠落している方向

生活様式、嗜好様式、表現様式・⇨建築デザイン・一般デザイン・意匠  
の側から見る見方

無意識界、日常習慣、民族心理・⇨日常行為・集団行為・特別行為、特  
に宗教以外の祭り・儀礼行為および  
住宅内における社会的行為の範疇

##### ・提案 住居文化に関し、言語のアルタイの帯にあやかり、住居の

アルタイの帯の認識

## の提起

### ・仮説命題 今次研究上の仮説命題主文

#### i 建築について

- ①日本に存在する住居構成空間に相当するものがアルタイの帯の民族のそれにもあるのか
- ②日本に存在する住居空間構成に相当するものがアルタイの帯の民族のそれにもあるのか
- ③日本に存在すると認められている建築様式・意匠様式と同様なものがアルタイの帯の民族のそれにもあるのか
- ④日本に存在すると認められている嗜好様式・生活様式と同様なものがアルタイの帯の民族のそれにもあるのか

### ・これまでの他人の気になる仮説

#### i 建築の淵源について

- ①昔は同じ堅穴だったのに何故日本と中国は今このように分かれたのか  
／建築学者A氏の疑問

- ①'上への疑問 昔中国と日本は同じ堅穴だったか、堅穴は成長するか

#### ii 建築家のセンスの突出

- ①俺（ある建築家）が好きそうな建築・部分・デザインだ（中国の一デザイナーを見たときの建築家S氏の嘆声）
- ①'上への疑問 建築はそもそも民衆がつくって来た。現在建築家の力がクローズアップされて来ているとはいえ、その基調は変っていない筈である。建築家の嗜好で日本の住宅の方向が決められてよいのだろうか。

### ・仮説命題の検証の方向

#### i 相似の追究（アルタイ系の相似）

#### ii 非相似の研究（アルタイ系以外との）

## ○出張報告書：書類として大学に提出したもの

### ・研究の仮説（本研究の力点<sub>1</sub>）

#### 住文化の帯の確認 ——日・韓・鮮・満・蒙・ウイーグル族の住文化の帯——

既に、韓国・朝鮮・満州の住宅については、昭和初期今・野村・村田、戦後吉坂・鈴木等により調査・研究されて来たが、これらの研究は民族単独・無比較の調査研究で、日本との文化の類似比較については行なっておらず、ましてその民族性の深層にまで達しての研究はなされていない。本研究者は、既に1986年7～8月と1990年5月の2回にわたり、日－韓間の住宅の土間や板間・畳間・紙張り間・紙障子・襖障子・板障子・天井仕上げ等ハードの面、間取り・意匠の仕方や大壁にせず真壁にして柱・壁を意匠的に尊重する等ソフトの面、上足・座る式等の生活起居様式の面等に類似性のあることを把握して来ている。この傾向が上述アルタイ系諸族にも存在するかを見、確認するのが今回の研究の目的である。

## I 章 調査の経過

今回の研究は、序章に掲げた目的を達するため、次に示す範囲の調査地に対し、以下に示す調査員で、後に示す調査基準<sup>1</sup>を用い、本章で示す行程・日程で調査を行なった。

調査の範囲：中国の {中部}・{南部}・{北部}・{〔西北部〕・〔西部〕・〔東北部〕・〔蒙古部〕}

尚、詳細はII章参照のこと

この地域は中国の華中・南西部を除く広大な地域であり、一回の調査ではその概貌を掴めないものであるが、仮説を立て、生活型ないし文化型の特徴点に焦点を当てる形で調査したので、小規模調査の割りには成果が上がったと考えている。

参加調査員：持田照夫・深沢大輔・神戸信俊・持田昭子

調査の日程：前期調査1990年7月24日～31日、後期調査1990年8月1日～21日、詳細は本章参照のこと。

調査の行程：詳細はII章で説明するが、その大略は本章（I章）でも知ることが出来る。

### ・調査の日程並びに行程

前期調査と後期調査に分けて行ったが、それを表にして以下に示す。

(注) 1：今回は紙面の都合で掲載割愛。

中国民族住宅研究—前期日程表— (実行日程表)

月日	午 前	午 後	夜	泊
7/24 (火)	[出発]	15:35 大阪発 CA922便 17:35 上海着 ◇紅橋迎賓館へ	・レセプション 中国側 外事弁公室 (受け入れ側) 上海設計院, 同済大学	上海泊
7/25 (水)	上海市設計院にて 持田照夫 態論講義 設計院側 都市計画施設 計画説明	外部にて 上海市都市セン ターを見学 ◆上海市郊外農家 見学		上海泊
7/26 (木)	10:00上海発 12:00広州着	主要建築物見学 ●清代の書院 中山記念堂 広州博物館 等	郷土料理試食 (子豚・蛇料理) ・同上レストラン内部	広州泊
7/27 (金)	塔(六榕) ・広州の住宅団地 友誼商店等見学 11:50広州発	12:50桂林着昼食 ●日本式レストラン ・町並見学◆住宅見学 (二階建三合院・8家族住)	・夕食ホテル ・夜の市街地見学 ●店屋見学 (郷土食屋入る, 靴屋他見る)	桂林泊

7 / 28 (土)	郊外地見学並びに 漓江川下り ▲沿線の住宅見学	桂林市内 漓江川下り ▲沿線の住宅見学 市場(友誼商店) 見学		桂林泊
7 / 29 (日)	桂林郊外 ●住宅地見学 住宅見学 ◆運転手の家AP ◆銀行員の家AP	桂林旧蹟 ●清代の城館見学	18:10桂林発 20:40北京着	北京泊
7 / 30 (月)	北京古蹟 万里の長城 見学 他	明の十三陵 見学	さよなら- レセプション (中国側受け 入れ実務班) ・〔王府井ペンダック〕	北京泊
7 / 31 (火)	北京見学 ●故宮 見学	●天壇 見学		北京泊

中国民族住宅研究—後期日程表—

(実行日程表)

月日	午 前	午 後	夜	泊
8/01 (水)	8:30北京発 10:30蘭州着 市内への道 2時間, 途中故障 窓外見学	都市諸施設見学 白塔山公園 見学 都市計画 俯瞰	市街見学 公園沿道 自由市場への道 自由市場 ●宿泊館	蘭州泊
8/02 (木)	8:30蘭州発 9:20酒泉レグ 10:20敦煌着 ホテルへ 休息	市内見学 市内風景 絨毯工場 住宅 ◆回族の家	砂漠 天の池・寺院跡・ ラマ寺見学 交通は 駱駝騎乗	敦煌泊
8/03 (金)	漠高窟 第三八・四二七・四二八・ 二四二・二四九・二四六・ 二三一・九六・一四八 窟等を見学	馬の塔博物館 見学 ●映画撮影所の跡 (三国史の舞台 跡か)を見学	r.	敦煌泊
8/04 (土)	10:30敦煌発 11:30烏爾木斉着 ホテルへ 昼食	市内見学 モスク <sub>1</sub> (木造) モスク <sub>2</sub> (石造タイル貼り) 見学	r. 大会堂見学	烏爾木 斉 泊

8/05 (日)	休息 吐魯番行き バスにて 9:30烏爾木齊発 ・途中農村観察	吐魯番農村着 農村見学 ◆農家 <sub>1</sub> ◆農家 <sub>2</sub> 見学	吐魯着 藤棚下の接待 を受ける 民族踊りを見学 ●宿泊館	吐魯番 泊
8/06 (月)	文化跡見学 ・三蔵法師寺跡 モスク(蘇公塔) 等見学	烏爾木齊へ/バス 千仏洞 火炎山 ・古墳・工芸館 等見学	烏爾木齊着	烏爾木 齊 泊
8/07 (火)	◆ウイグル族の家 (吐家) 見学 AM10:30	天山山脈景勝地 天池の山水自然 ◆ハザック族の包 等見学 PM3:00		烏爾木 齊 泊
8/08 (水)	◆朝鮮族の住宅 見学 AM11:30	◆漢族の住宅 見学	烏爾木齊発20:00 喀什着 22:00 ●ホテル/片仮名 =[カシュガル色満ホテル] 夕食 23:00	喀什泊
8/09 (木)	文化跡見学 モスク <sub>1</sub> 墓 広場 モスク <sub>2</sub> 見学	スーク見学 ・帽子屋, 宝石屋, 日用品屋, あらゆる職種ここにあり ◆ウイグル族住宅 (中上型) 見学	r. 夕食後 民族踊りを見学	喀什泊

8/10 (金)	モスクの朝の祈り 見学 伝統工業見学 刺繍工場, 縫製工場, ナイフ 工場, 楽器工場等 見学	絨毯工場見学 ウイグル族居住地区 ◆住宅見学 エカル家 民族幼稚園踊り 見学	19:00喀什発 20:30烏爾木着 上7日と同じ宿	烏爾木 齊 泊
8/11 (土)	9:00烏爾木齊発  (北京空港滞留 3時間)	16:00哈爾濱着 ホテルへ ・途中の農村 景色等見学	r.  ・宿泊館(ホテル)	哈爾濱 泊
8/12 (日)	10:30~12:00 黒龍江省の 建築学会の人 市設計院の人 達と交流	昼食(市中央)後 勝利公園 ・北海公園 ・極楽寺 商場 等見学	夕食(同左)	哈爾濱 泊
8/13 (月)	住宅見学 建築学会職員の ◆住宅見学(漢族) 駅及び周辺 見学 列車にて哈爾濱発	・沿線農村観察 15:00長春着 市内見学 諸建物 民族館前踊り	r.  ●宿泊館(館様住宅)	長春泊
8/14 (火)	文化跡見学 吉林省博物館 ●(旧王宮) ●(王妃宿所) ・旧都ホテル見学食事	市街建物見学 ・旧関東軍司令部等旧日本施設 ●旧関東軍司令官邸 住宅地見学 ・旧日本人居住区見学		長春泊

8 / 15 (水)	10:00長春発(列車) ▲窓外農村観察 ・車内施設設備 等 見学	14:30瀋陽着 ホテル 市内見学	夕食	瀋陽泊
8 / 16 (木)	文化遺蹟 <sub>1</sub> 見学 東陵 (清初代二代墓) 餃子屋 食事(昼食)	文化遺蹟 <sub>2</sub> 見学 故宮 (清北京入前の宮殿) 団地見学 諸民族混合地区	r.  ・宿泊館	瀋陽泊
8 / 17 (金)	8:00瀋陽発(飛行機) 〔9:30北京着〕 天安門 人民大会堂 中和園 等見学	●食事(中和園内西太后食堂) ●昆明寺見学 〔16:00空港着〕 休息食事 〔19:30北京発〕	21:00呼和浩特着 ●内蒙古賓館 意匠・仕様良 (23:00夕食, そば・ 餅/郷土食)	呼和浩 特 泊
8 / 18 (土)	白麦村 ◆包群村の包 民俗塔 ◆蒙古族の住宅 等見学	・食事(白麦村内伝統的食儀式) 文化的建造物 ・蒙古の寺(白麦村内) 市場 等見学		呼和浩 特 泊
8 / 19 (日)	歴史的建造物 ・白塔(遼代・八角七重) 見学(AM9:30~) (八角に意味あり, 仏像良) (文革被災, 遼代肅慎の作)	体育館 見学 ・(壁面山水画手法日本に似る) 昼食(ホテル=内蒙古賓館) 博物館 見学 (蒙古族の衣装様式わかる)	r.	呼和浩 特 泊

8 / 2 0 (月)	8:40 呼和浩発 窓外農村観察 (10:00 北京着) 元隆商場(絵書・文物) ・(デザイン・材質ともに疑問)	四海賓館 食事 中国医療被施術 (19:40 北京発) (17:10 発予定遅れ)	22:00 上海着 東湖賓館 遅夕食(特別食堂にて) 特産食(渡り蟹・饅頭) 特産文物展観	上海泊
8 / 2 1 (火)	空港へ 帰国手続き (手間取る)	12:30 上海発 14:30 大阪着 帰宅	[帰着]	〈大阪〉

(注) r. : レセプションのあったことを示す

- ◆ : 調査住宅…………… (外観内観実地見聞)
- ◇
- ▲ : 重要参考住宅… (外観見聞)
- △
- ▼
- ▽
- : 重要参考建物… (外観見聞) 重要度極大
- : “ ” 重要度大
- : “ ” 重要度普通
- ・ : 参考建物街区… (外観見聞)

(注) † : 調査基準は、研究の仮説設定(序章)・調査計画(序章・I章)があつて初めて考え出すことが出来るものであるが、この仮説設定は序章に出ているものの外以下に示すものがあり、これが研究意図をよく示し調査基準を割り出す方式様式過程を説明している面もあるので、後に資料として資料の部に掲げることにする。(但し、今回は掲載できなかった)。

## II 章 訪問の住宅

はじめに訪問した地域とそこでの経過、つまり行程について述べ、次に訪問した建築や空間を施設別に一覧表にして示す。この中で訪問住宅を一まとめにし分かるようにした。

### ◇行程

前期行程と後期行程があり、それを旅の地域的・地域的活動状況等をも交え訪問し

た順序に述べることにする。

●前期行程

i) 学術交流

上海：上海市設計院にて

持田が「講義」を行なう。内容「伝統保持と革新」。

出席者：上海市設計院職員・上海市実施設計担当者・同済大学教授中国建築学会  
会長載復東氏・他50人。

先方から市の計画改造状況の説明を受け意見を求められた。

回 答：旧市街を壊し全く新しい市街を造る愚を説く。

使える空間・美観・文化財・技術が失われるだけでなく、経費も2倍も  
かかる故。改造でなく新市建設を提言。

北京：外事辦公室職員との交流にて

副所長屈氏の助言を得た。

内 容：中国の住宅を究めるなら北京の四合院を、都市を探るなら西安を見るべ  
きであると。古い市街・インドから高僧が持ち帰った經典翻訳用の塔〔大  
雁塔〕等ありと。

回 答：この重要性は認識するが、今回は目的が異なるため割愛し次回を期すと。

応 え：了解と。

ii) 中国諸都市の住宅及び居住状況の視察をすることが出来た

上海：居住地としての都市を見学、近代中国の都市開発の状況を知り得た。

近代式居住諸施設を知り得た。

例<sub>1</sub> = 大統領宿泊用として準備されたという虹橋迎賓館に泊まる。

(但し、カランが壊れていたり。ドアの戸締まりがよくなかったり、中  
国の現代の技術水準・補修水準を示していた。)

例<sub>2</sub> = 事務所建築日常仕事の場としての設計院の建物見学。

例<sub>3</sub> = 大衆が日常使用するものとしてのレストラン (設計院の建物に付属) 使用。

例<sub>4</sub> = 建設中の高層建築の室・喫茶部見学。

例<sub>5</sub> = 大ホテルの演舞場にて音楽鑑賞。

(設計・材質・表面・意匠に納得できないものあり)。

近郊蔬菜農家を見学することが出来た。(戦後開発入植地)

◆住宅(2 L K 2層2世帯、これにより農家の住居水準の片鱗を知り得た) 見学。

広州：伝統的建築を含め、諸施設を見学出来た。

中山堂見学。

清時代の寺。

清時代の書院を見た。

博物館を見学。

塔(七重の塔)を見学。

桂林：住宅・城館を含め、諸施設を見学することが出来た。

日本風レストラン(熊本の人の設計、和紙・木肌・臭い等良い)

清時代の館（柱朱色が横架材の所を貫いている、清様式か）を見る。

◆住宅<sub>1</sub>（2階建て四合院形式、8家族居住）飛入りで見学。

◆住宅<sub>2</sub>（2L Kのアパート、運転手の家、絨緞敷き、整う）見学。

◆住宅<sub>3</sub>（2L Kのアパート、銀行員の家、絨緞敷き、整う）見学。

この家は路上で案内の陳さんが頼み見せてもらう。

住宅地（上述の住宅<sub>2</sub>・住宅<sub>3</sub>がある住宅団地）を見学。

市街地（朝食は家族全員路上外食、昼は帰ってまたは職場で食べるという、ただし路上の清潔度は疑問）見学。

北京：古い由緒ある建造物・跡趾を見学した。

万里の長城を見学・登攀。

明の十三陵を見学。

故宮を見学。

天壇見学（この一点だけは後期の行程に入るがここに記す。[昭帝門—皇穹宇—祈年殿]と結ぶ結構の面白さに加え、皇穹宇に皇帝の位牌・左の殿舎に風の神・右の殿舎に気の神等を祀っていたのが面白かった。これは、宮中の〔賢所・神殿・皇霊殿〕と似ているか／アルタイ系の特徴か）。

## ●後期行程

i) 研究的に諸地域・諸都市・諸地方・諸施設（一般施設・文化施設）を訪問することが出来た。

①蘭州・敦煌を中心とした居住状況を知った。

蘭州：この急速工業化人口集中都市の全体と都市計画を知り得た。

白塔山公園計画を知り得た（市民生活中心の公園）。

都市計画を知り得た（白塔山からの鳥瞰による）。

回教寺院の外観を得た。

回教住居を外から観ることが出来た。

敦煌：文化財・住宅を見学出来た。

漠高窟を見学（鮮卑等往昔の住民の壁画、モチーフ〔例、雷神図〕日本に似るものあり）。

◆回族の住宅を見学（三合院形式、綺麗に整っていた）。

馬の塔見学（砂漠では如何に馬が大切な家畜であるかを知る）。

映画スタジオ村見学（色々の種族の住宅・商業建築・官庁・城・壁等）。

②烏尔木齐及びその周辺の居住状況を知り得た。

烏尔木齐：宗教施設・集会施設・居住施設・等を見学。

大会堂でこの地域の外辨の方達と会合と食事をし館内見学。

回教寺院<sub>1</sub>（木造）を見学。

回教寺院<sub>2</sub>（石造）を見学。

◆住宅<sub>AP</sub>（ウィーグル族の家、3L K、夫運転手・妻公務員、居間は床絨緞敷き・壁2面絨緞飾りで共に美麗、家族は椅子式生活。但し、妻の父母来家時客室の

ベッドの上で床坐食をする [父ウズベック族・母ウィーグル族]、フutonは積み上げ式・客接待は木の卓に菓子、山盛り豪華・美麗) 見学。

◆住宅<sub>AP</sub> (漢族の家、壽さんの夫の祖母の家、夫大学教授・妻専業主婦、金持、室内整備、床敷も床坐食もなく、椅子食、一日中椅子生活) 見学。

住宅地区 (階段：日本と同じ、狭く汚い) 見学。

③吐魯番及びその周辺の文化と居住状態を知り得た。

吐魯番：農村住宅2戸を見学調査することが出来た。

◆農家住宅<sub>1</sub> (男寡夫、一列室型住宅、寝室は土間床上座型、床上は絨緞敷き、壁は織物 [絨緞か] で被覆、天井茅様織物で空見える、前庭は敷物を敷き、客接待・家族団欒をする。戸外寝 [縁台様台]、前面は窓広く開口、他室は神室、天井筒丸型 [かまぼこ型]、現在物置様使用、色々の大きさの壁の凹み [押入様] あり。/ウィーグル族の家)。見学

◆農家住宅<sub>2</sub> (住宅<sub>1</sub> から北に数軒の家。住宅<sub>1</sub> より女主人自ら案内、間取りは住宅<sub>1</sub> と同様、但し寝室隣の部屋は天井が平で、寝台を置き寝室に使用。客接待は主寝室の床上に小机を出してその上に菓子を盛り出す。前庭葡萄棚下は住宅<sub>1</sub> 同様、敷物を敷き接客・家族団欒の場とする [少女がこの敷物の上で寝そべっていた]。家の西側塀の蔭にベッドを出し屋外寝をする。屋敷の門の脇の小川は野菜・食物・身体等の洗い場・避暑気場・水浴場として使用している/ウィーグル族) 見学。

吐魯番：文化・生活を知り得た。

民族踊りを見学することが出来た。その優雅さ・うまさ・大胆さ・絢爛さ・姿勢に感激/ウィーグル族 (加藤九祚氏や国連大使等も見学していた)。

モスク見学。

三蔵法師宿泊寺院廃趾見学。

火炎山見学。

千仏洞見学 (ドイツ人の文化財持ち去りの余りの惨さに驚く)。

古墳見学 (ロシア人の盗掘の跡あり、これで文明人かと思う)。

④白雪を頂くキレン山の中に青き自然とその中に暮らす生活を見る。

天池：砂漠の中に自然を見ることが出来た。緑の山・清水・澄んだ湖・雪嶺。

緑の自然、泥色でない清水、青、緑、澄んだ水、澄んだ空/長野県の様 (白馬岳近辺の様)、黄河の濁りを見て来た眼には新鮮・清冽に見え驚異、中国では稀有か。

◆テント住宅見学 (床は草の上に絨緞を何枚も敷きつくる、テントは羊の皮、丸型、壁は2面に絨緞を覆う、イロリは入り口の方向を残し3方に坐る座あり、客の座・主人の座・妻の座。日本の農家の客座・横座・嬪座と似ている/ハザック族)。

⑤ (烏尔木齐) 再訪

◆住宅 (朝鮮族の家、クンバン [ハナ]・トゥルチュエ・セセツチュエ\*の3部屋構成、床は敷物を敷き、そこを家族談笑に使い、客を接待して飲み合う/沖縄住宅の一番座・二番座・三番座に似ているようで面白い)。

※：クン=大・バン=房・ハナ=第一・トゥルチュエ=第二・セセツチュエ=第三の意

## ⑥喀什

宿舎（玄関に整列し、「いらっしやいませ」と言う、日本の昔と同じ）の歓迎に感激。

モスク<sub>1</sub>（美しい形）見学。

墓（北京の異民族に嫁した王女は望郷の念止みがたく悶死した、その遺体を故地に移し祠〔まつ〕ったもの）見学。

◆住宅（ウィーグル族の邸宅〔中の上〕、この家の主婦が案内、メインルームは下足を脱いで上がる。ライジング25センチメートルの上げ床、床仕上げは板床、その上絨緞敷き、壁絨緞壁掛け左右2面、前庭に突き出たヴェランダ様露台あり〔韓国縁台・日本広廊下に似る〕、これ接客用・家族用。その他、家族の部屋・客泊用の部屋あり。土間・高床式の部屋、ベッド式の部屋が混じる、客接待は大机に菓子等盛り出す。豪華、この様はウルムチのウィーグルの家〔No.8〕に似る）。

市場（喧噪、活気あり。日用品・土産品、面白いもの、発明的なもの、デザインの良いもの、ゴツイもの、民族的なもの、野趣のあるもの等多種多様のもの、等売っている）の見学。

民族幼稚園の踊り（何とかかわいく、何と素晴らしい踊りか、しかもカメラの前に少しもたじろがない。子供なのにこのように上手に踊れるとは驚きだ。日本に招きたい位だ）を見る。

モスク<sub>2</sub>（カウディに似た塔。美しい形、清時代のもの、漢字も細・直・勁の清式。）見学。

## ⑦哈尔滨

満族集中地区見学計画…遠くてこの旅程では無理と、次回を期す。

繁華街漫步…食事したり街ブラをしたりした（日本時代より良くなっているか、悪くなっているの評もあり）。

◆住宅<sub>AP</sub>（漢族のもの。女性職員の家、父親対応、整うが飾りが無い）の見学。

公園<sub>1</sub>…松花江沿い（災害勝利記念公園）。

公園<sub>2</sub>…北海公園（日本式庭園、日本住宅様会堂あり）。

## ⑧長春

宮殿（傳儀とその夫人たちの館）見学。

関東軍司令部跡（旧日本軍施設、現吉林省施設、日本の城様形態の建築、保存状態良好）見学。

憲兵隊司令部（やはり旧日本軍施設、キッチンとして残されている）見学。この他の、元日本人のものでデザインの良いものがかなりの数残っていた。

元日本人宿舎地区（現在、小汚くなっていた）}但し、元のデザイン自身は良い}

## ⑨瀋陽

東陵＝満洲朝祖廟（形：前方後円様墳…前方は廊内四合院風のところがそれに当るようにも見えるが〔但し本質は満族特有のものと考えられる〕、後円は廊外後方にあり山様緑樹で覆われて円墳様の形をしている）の見学。

故宮＝北京遷都以前の満洲朝発祥地宮都（北京の故宮の1／12の規模といわれる）。中に清の皇帝の寢殿あり。左右非対称でやや左寄りの入り口、中に□の字型炕（漢族の炕と異なる）、これは実は高床座〔家父長の座の決まり・家族生活接客生活両用空間〕である。この他、フトン式敷き物・脇息・山型背もたれ・等、韓国風の床上座を持った皇帝休息所等の見学。

#### ⑩（北京）再訪

平和園

長廊下（西太后の館）見学。

昆明寺（上部城塔状建物：満式槽様塔・白壁・八角塔・赤壁／チベット式か。

下部構築物：緩傾斜城壁様壁、赤壁、その壁に近代ビル様の小さい窓が穿たれる／チベット式か）の見学。

#### ⑪呼和浩特

宿舎＝内蒙古賓館（木肌・木目・隅のトメ仕様・表面透明材使用等全く日本人の趣味に合う。それに臭いなし・カラシ完全・湯舟良し。更に、レストランの天井八角形・梁木肌木理出しデザイン等。これら日本人の趣味に合う／センス同じか）にて宿泊・食事。

テント村＝観光村（テント内はハザックのものに似ているか、観光用で原型が分からず残念、今は便所を設けている）／白麦村の見学。

◆住宅（蒙古族 煉瓦造、1万元かかったという。一列4室、前面全面開口型、土間床上方式、炕使用、床上は敷物、壁は掛け物、床上脱靴、ここに小机を出し菓子を盛り出す／客接待〔ウイグル族・韓族と同様の様式〕）の見学。

寺<sub>1</sub>（テント村にあるもの、部分しか見られなかったが赤の勝った華麗な様式〔これを蒙古式と見てよいか、チベット影響式か不明〕）の見学。

白塔（遼〔肅慎〕時代のもの、塔・壁面仏像とも念入りに巧者につくられている）の見学。

寺<sub>2</sub>（西蔵風内部か、円い幡様の下げ飾りが下がり少し暗い雰囲気。お賽銭を上げたら線香をくれた。天井は格天井になっており、そこには天蓋がかかり、それとは別にその前方に凹部がある）は飾られ、賑やか。外観は日本—韓国—満族—蒙古と連なる型と見られるか）\*

（注\*：これらの建物には、彩色・窓型・壁面処理・塔・その他・全体の形態等に多分にチベット様式に似た要素が認められるが、もしこれらにチベットの影響があるとするならば、この蒙・満の地にまでチベット文化が来ていたのかと思う。このことを漢は本質的に反発しているのではなかろうか）

現在使用中住宅属性別一覧表 ◆◆◆印

地区	居住圏	住区	階級	業種	民族	住居型	住宅形	構造	屋根形	屋根材	窓型	空間型	室内仕様
番号	華西北 中西東 南北北	大中村 都市落	市郊農 内外村	勞中農 動間業 者層者	漢 族	合包横新 院一 型型型	田丸一長 い字方 形形形	柴組横一 皮積架体 式式式	立奇切陸 錐棟妻屋 形形形	草布瓦新 藁皮石建 葺葺葺材	丸稍普稍広 天小中大 窓窓窓窓	草土上 土間床 敷鋪座	床壁天井 敷掛格 否否否
01	華中	上海	近郊	農家	漢族	入植集團	2階独立	煉瓦漆喰	屋根無し	防水不明	近代型	○ ○ ○	××× ソファ有
02	華南	桂林	旧市	? 種々	? 漢僮か	福三合院	2階8竪	在来木造	? 伝統町屋	瓦葺き	○ ○	○ ○	×××
03	華南	桂林	新団地	○ 運転手	? 漢族	高層集合	○ FL(0階)	RC造	陸屋根	防水不明	○ 普通中窓	○ 絨毯敷	○? ○? ビアノ有
04	華南	桂林	新団地	○ 銀行員	? 漢族	高層集合	○ FL(0階)	RC造	陸屋根	防水不明	○ 普通中窓	○ 絨毯敷	○? ○×
05	西北	敦煌	近郊村	? 社信補助	○ 回族	三合院型	○ 囲い型	○ 煉瓦(木)造	○ 奇棟	○ 瓦葺き	○ 稍狭い窓	○ 瓦敷物	×××
06	西部	吐魯番	近郊村	○ 寡夫(婦)	○ 維吾爾	横一列型	○ 一の字型	○ 煉瓦(木)造	○ 奇棟	○ 瓦葺き	○ 稍広い中窓	○ 瓦敷物	○ ○ ○ 草編天井
07	西部	吐魯番	近郊村	○ 夫婦(婦)	○ 維吾爾	横一列型	○ 一の字型	○ 煉瓦(木)造	○ 奇棟	○ 瓦葺き	○ 稍広い中窓	○ 瓦敷物	○ ○ ○ 格天井 (小棟子)



往時使用住宅属性別一覽表…◇印

番 号	地 区	居 住 圈	住 区	階 級	業 種	民 族	棟 配 列	住 宅 形	構 造	屋 根 形	屋 根 材	窓 型	空 間 型	室 内 仕 様
15	華西北 中 華	大中村 市 都 市	市郊農 農 動 間 業 者	勞中農 勤 間 業 者	勞戰農 務 牧 種	漢 族	他 包 構 新 院 型	圓 一 字 方 形	柴 組 橫 一 皮 積 架 體 式	立 寄 切 陸 錐 棟 妻 屋 形	草 布 瓦 新 葺 葦 皮 石 建 葺 葺 葺 材	丸 稍 普 稍 広 天 小 中 大 大 窓 窓 窓	草 土 上 間 床 敷 鋪 座	床 壁 天 井 敷 掛 格 否 否
16	華南	上海	旧別荘	故高官	迎賓館	漢族	豪華3室	口の字型	R C 造	近代寄棟	近代葺き	近代大窓	木造葺 大窓葺	? 絨 カー pet
17	華南	廣州	旧書院	官吏	博物館	? 滿族	垂 内部不明	一の字型	木造	賑棟飾り	瓦葺き	南方全面窓	? 甌	? 裸 繪 格
18	華北	桂林	旧城館	清將軍	博物館	? 滿族	垂 内部不明	一の字型	木造	赤柱強調	瓦葺き	南方全面窓	? 甌	? 裸 ? 格
19	華北	北京	旧王宮	清皇帝	博物館	滿族	垂 コ字 型	一の字型	木造	入り母屋	瓦葺き	南方全面窓	た?座	? 繪 格
20	西部	天池	中蔵村	遊牧者	博物館	滿族	垂 神 龕 1 室 包 型	圓 の 字 型	木造	円錐形	瓦葺き	前方入口窓	甌 座	? 繪 格
21	東部	長春	傳儀住所	滿州帝	博物館	滿族	實 素 宮 殿 並 列 式	変 一 字 型	石造	? 圓 錐 形 切 妻 型	瓦葺き	外 方 面 中 窓	? 上 座	? 繪 格 上 座



別荘・ホテル・迎賓館等（住時使用・現時使用）属性別一覧・・・▲印

地区	居住圏	住区	階級	業種	民族	住居型	住宅形	構造	屋根形	屋根材	窓	型	空間型	室内仕様	
番	華西北	大中村	市郊農	中農	労働者	農務者	他	合包横新	院	型型型	型型型	一	院	型型型	院
号	中西東	都都	市市	市市	市市	市市	市市	市市	市市	市市	市市	市市	市市	市市	市市
15	○ 華中	○ 上海	○ 近郊	○ 高階級	○ 漢族	○ 豪華3室	○ 口の字型	○ R C 造	○ 近代奇棟	○ 近代葺き	○ 近代大窓				
27	○ 華南	○ 廣州	○ 旧市	○ 溪酒家	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族
28	○ 華南	○ 廣州	○ 旧市	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族
29	○ 華南	○ 廣州	○ 旧市	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族
30	○ 華南	○ 桂林	○ 市内	○ 迎日用?	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族
31	○ 華南	○ 桂林	○ 市内	○ 迎日用?	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族
32	○ 華北	○ 北京	○ 市内	○ 迎賓用	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族	○ 漢族





住宅観察用参考施設属性別一覧表 …… ▼印 (前期行程分 [ -上海- -広州- -桂林- -北京- ]) (2章2/1)

番 号	地 区	居 住 圏	住 区	階 級	業 種	民 族	施 設 型	施 設 形	構 造	屋 根 形	屋 根 材	窓 型	空 間 型	室 内 仕 様
	華西北 中 西東 南 北	大中村 都 市市落	市郊農 村 内外村	勞中農 働間業 者層者	勞職農 務務牧 種種種	漢 族	伝垂垂近 統旧新代 型型型型	囲丸一長 い 字方 形形形形	柴組横一 皮種架体 式式式式	立寄切陸 錐棟妻屋 形形形根	草布瓦新 葦皮石建 葦葦葦材	丸稍普稍広 天小中大 窓窓窓窓窓	草土上 土間床 敷舗座	床壁天井 敷掛 格 否否 否
44	華中	上海	都市中心 臥上緑地	労働者 労働者	嬢・精 漢	漢族	近代型	長方多し	RC造・ <small>リ-リ</small>	陸屋根多	新建材	〇〇〇 大中小色々	〇 蘇杭式	中国の臭い 敷飾
45	華中	上海	臥上緑地	労働者 労働者	嬢・精 喫茶店	漢族	近代型	長方多し	RC造	陸屋根多 ?〇 ピルの中	新建材	前面全面 椅子座式	? 中国的 敷飾	
46	華中	上海	市郊農 村	労働者 労働者	嬢・精 演舞場	漢族	近代型	長方多し	RC造	陸屋根多 急勾配切妻	新建材	大窓 椅子座式	板無 彩	
47	華南	広州	市郊農 村	労働者 労働者	嬢・精 記念館	漢族	近代型	長方多し	RC造	陸屋根多 立錐形	瓦葺き	〇 横長大窓	〇〇〇 洋式壁紙 絨像 襦子	
48	華南	広州	市郊農 村	労働者 労働者	嬢・精 博物館	漢族	近代型	長方多し	RC造	陸屋根多 放射錐型	瓦葺き	幅広大窓	洋式壁紙 板	
49	華南	広州	市郊農 村	労働者 労働者	嬢・精 七種/格・文化財	漢族?	近代型	六角七重塔	木造	放射錐型	瓦葺き	層各各面口	洋式壁紙 絨背 襦子	
50	華北	北京	市外遠方	労働者 労働者	嬢・精 長城・文廟	漢族	組積構造物	長城型	組積造	放射錐型 筒状・新造	瓦葺き	銃眼型	立座	露無 無

51	華北	北京	明13陵	附屬	墓・文閣	漢	族	組積建築物	地下墓型	甄組積造	露出部無し	屋根部無し	窓部無し	立座	露微筒
----	----	----	------	----	------	---	---	-------	------	------	-------	-------	------	----	-----



59	西部	敦煌	石窟寺	文化財	莫高窟 <sup>5</sup> ・鮮卑等	壁画・天井画	土	岩	屋根無し	自然の岩	入り口(備忘大)	観音による	土製
60	西部	敦煌	農村	記念物	馬の塔 <sup>6</sup> ・現地人不明?	窟窟新築 <sup>7</sup>	土	瓦積造	屋根無し	煉瓦造	窓無し	立位	土
61	西部	敦煌	廟宇	地方行政官署	商賈の住宅 <sup>8</sup> ・商業建築	展示施設	土	瓦積造	屋根無し	煉瓦造	窓無し	立位	土

(注) 2: 中国人のセンスを知る事が出来るか、但し、このデザインが何族のものか不明。見たところでは、多分にこの地方の古族の影響があると思  
うし、昔支配した満州王朝の影響があるように感じる

3: 回教徒のセンスを知ることが出来る

4: 回教徒の住宅概念の一部を知ることが出来るのでは

5: 鮮卑等の空間・シンボルに対するセンスを知る。

鬼太鼓打ち図ここににあるものは、後満州国皇帝椅子前置き数物の図柄中にも認められた。

またこれは、群馬県一の宮前神社最上階の窓脇絵柄・俵屋宗達の絵柄にも認められるものである。

6: 馬を記念した塔、往昔の現地人が如何に馬を大事にしたかが分かる。当時は馬は、さばく生活ではなくてはならぬものであるが、死活を制する手段でもあった。それで、人々は旅の平穩、往來の平穩を祈念してこのような塔を建てた。数えるとも全部で7層であるのも興味を引くが、それが六角であり上に宝篋印塔状の頭柱が付くなど、祈念建築物としてのデザイナーが面白い。これにより、現地人のモニュメンタルなシンボル空間に対するセンスを知ることが出来る

7: 材料は色から見て煉瓦と思われが、他の材料例えば甎であるかは不明。

8: ここでは諸種族の住宅の他、居酒屋等各種商業建築・官庁建築・城壁・城廓・祈念塔・祈念碑等の復元模型を見ることが出来、それらに関する諸種族の空間の造り方、空間に対する計画の仕方やデザイン・センスの方向を知ることが出来る

9: この映画スタジオ村においては、構造は煉瓦造(甎造も)石造等の組積造・木造・左の混合、屋根形は立錐形・片流れ・切妻・寄棟・方形・入り母屋・陸屋根等の各種形態、屋根材も草屋根・土置き屋根・瓦屋根・他の各種葺材、窓型も窓無し・小窓・中窓・大窓等の各種窓型、坐位も立位・椅子座坐位・座坐位(座敷座坐位)等各種の坐位、室内仕様(塔等では室外仕様)も床の素土・加工土装・舗装・敷物敷き装・板敷き装等の、壁面の仕様も素土・素壁土・中仕上げ壁・素絵掛け・額装絵掛け・軸装絵掛け・額装字掛け・軸装字掛け等の、天井の仕様も平天井・仕様天井(この中に梁現し・格天井等も入る)・素木天井・加工天井(彩色絵や彫刻等)・等の各種仕様が存在する。

これは、これらの建物を造り出す時代・各種民族・その思潮等によって異なって来ると考えられるが、それらの建物施設を支配出来る人達の階級・職業・趣味・等によっても大きく影響されて来たものと考えられる。

この、官庁・城・壁・商店・住宅・等の復元模型を見、それらの民族の空間の造り方や空間に対するセンスを幾分かは知ることが出来た。ただ、この城廓内は諸民族が軒隣に住んでいるというような人工の措置にも見られるように、後で作った趾があり生活状況の考証も精緻とは言えない面も見え、諸民族の住宅正面・屋根型・窓型・内部・等の形態・仕様・デザイン等で一部参考にすることが出来るものがあるにしても、全体としては生活様式研究の参考にするには少々難がある資料であることを感ずる

住宅観察用参考施設属性別一覧表 …… ▼印 …… (後期行程分ノ2 [ -烏尔木齊<sup>10</sup>、<sup>9</sup>、<sup>8</sup>、<sup>7</sup>、<sup>6</sup>、<sup>5</sup>、<sup>4</sup>、<sup>3</sup>、<sup>2</sup>、<sup>1</sup>、<sup>0</sup> - 吐魯番<sup>10</sup>、<sup>9</sup>、<sup>8</sup>、<sup>7</sup>、<sup>6</sup>、<sup>5</sup>、<sup>4</sup>、<sup>3</sup>、<sup>2</sup>、<sup>1</sup>、<sup>0</sup> ] ) (2章2ノ3)

番 号	地 区	居 住 圏	住 区	階 級	業 種	民 族	施 設 型	施 設 形	構 造	屋 根 形	屋 根 材	窓 型	空 間 型	室 内 仕 様
	華西北 中西東 南北北	大中村 都市 市市港	市郊農 都 内外村	勞中農 動問業 者層者	勞職農 務務牧 種種種	漢 族	伝垂垂近 統旧新代 型型型型	圓丸一長 い字方 形形形形	柴組横一 皮積架体 式式式式	立寄切陸 錐椽妻屋 形形形根	草布瓦新 彙皮石建 葺葺葺材	丸稍普稍広 天小中大 窓窓窓窓	草土上 土間床 敷舗座	床壁天井 敷掛格 否否否
62	西 部	ウルムチ	市中心	勸遊期 大会堂	(維維維 <sup>11</sup> ) 不 明	会 堂	R C 造	陸 屋 根	不 明	柱 列 大 窓 型	明	明	椅 子 座	磨 白 装 飾
63	西 部	ウルムチ	市中心	食 堂	(維維維 <sup>11</sup> ) 維 系 維 系	迎 賓 室 型	RC造の上装木造	(陸 屋 根)	(不 明)	美 麗 大 窓 型	(不 明)	美 麗 大 窓 型	椅 子 座	絨 装 飾
64	西 部	ウルムチ	市中心	日 教 徒	日 教 徒	維 族	礼 拜 施 設	D-A <sup>10</sup> 木前二間式	石 造	12枚上 <sup>10</sup> 型	D-A <sup>10</sup> 材	柱 間 大 高 窓	床 座 式	絨 徵 徵
65	西 部	ウルムチ	市中心	回 教 徒	日 教 徒 <sup>2</sup>	維 族	文 化 館 が 礼 拜 施 設 が	尖 塔 七 間 廬 式	木 造	尖 塔 上 間 廬 式	尖 塔 ・ 屋 頂 棚	壁 中 稍 大 窓	床 座 式	絨 徵 徵 <sup>10</sup>
66	西 部	トウチ	迎賓宿舎	管理 者・教 職 員	維 族	住 居 空 間 <sup>17</sup> 住 宅 休 息 室 <sup>10</sup>	木 陰 柔 地 <sup>10</sup>	木 造	木 造	木 造	葡 萄 の 葉 <sup>10</sup>	全 開 放	土 座 式	絨 無 無 <sup>10</sup>
67	西 部	トウチ	迎賓宿舎	民 衆 宗 教 家 <sup>10</sup> 舞 踊 家	維 族	宿 舎 付 展 望 式 <sup>10</sup>	露 地 舞 台 <sup>10</sup>	露 地 舞 台 <sup>10</sup>	露 地 舞 台 <sup>10</sup>	屋 根 無 し	空? 鞆?	全 開 放	椅 子 式	葡 萄 棚 <sup>10</sup> 後 部 上 部 立 柱 間 廬 <sup>10</sup> 土 上 高 棚 <sup>10</sup>
68	西 部	トウチ	農 村	弘 教 遺 跡 <sup>10</sup> 勸 遊 期?	先 住 民 族 <sup>10</sup> 不 明	千 仏 洞	自 然 岩	自 然 岩	自 然 岩	屋 根 無 し	屋 根 無 し	新 開 放 入 り 型	(坐 座 か) 不 明	(座 か) 不 明 不 明 不 明



するの甚だ疑問。ソ連が与えたポーランドへの文化宮はその後不評で取り壊された。これは、ソ連内の文化宮（その一つがモスクワ大学）を模したものであるが、それらは現在ではソ連国内否否近のモスクワでも頗る不評であり、押し付けデザインが不適當なことを示している。この大会堂の車には、この自治区（新疆维吾尔自治区）の十程の地方中心（都市）のための部屋があるが、夫々その地方を構成する民族のデザインがなされていると言われている。椅子座位・座位等多面的になっていると思われ、これらのうちの幾つかの室内を覗いて見たが、豪華な飾りのある大きな椅子ややはり豪華な敷物等がばんやりと見えたと見えたが、細かなところはよくは分からなかった。

13： 気にかかったことは、この集まりが民族別でなく地域別という点である。これでは人々の発明性を萎縮させ眼らせてしまうであろう。大会堂室内仕様は、床が磨かれた敷石で出来ており客は滑らないよう厚い絨毯が敷かれている。壁面は柱が大理石柱柱間は上等の仕上げで出来ており、ところどころに象徴的なものが飾られている。例えば、部屋の入り口のところにはその部屋がどの都市のものかを示す文字板がデザイン的に示されているとか、食堂部と本館部の境のコーナーに大壁画が飾られる等である。天井は高く明るくデザインされており、照明なども立派なものが灯されている。ただ残念なのは、この種の建築に要請される手仕事の面であるが、これが些か工業的な前進とその産物としての内装の誇示の面が勝っているように感じられたことで、深い感動が得られないように感じられた。

14： 食堂は、この自治区（ウイグル）のデザイナーの性向の性格を反映してか、食卓・テーブルクロス等は立派なものであり、床には明るい・上等な絨毯が敷かれ、壁面には象徴的な絵画が掲げられ、天井にはシャンデリアが下げられる等、豊かに立派に造られている。ただここで迎えてくれた責任者が、この元からの居住民族でなく又この部屋を飾る諸文物を生み出しデザインし飾り立てた民族でもない漢族の人であったのは、その人が優しい暖かい人であることは別に、何かチグハグさを感じさせられた。前述外観と内観の矛盾の問題も同じである。ここで食事をし、これがこの地方の今の権力者のデザイナーの意図・方向であろうと推察したが、現在の中国全土に瀰漫している民族的才能（タレント）の不足、その発展の阻害・萎縮・停滞等の因になっていることを知ることが出来たと考えている。

15： 球形モスクの一つでドームは緑色タイル貼り、本体（本陣に相当する所）は石造・窓形半円形アーチ・前壁面三間分割・壁表面緑色タイル貼り付けの造りで、その回りに列柱式の外廊が回っている。内部は、立派な絨毯が敷き詰められてあり、礼拝所としての格式を保っている。現在でも古い市民・商人等の礼拝用に機能している。これにより維族の芸能・芸術の特徴、デザイナーの方向を知ることが出来た。

16： トゥルファンの農家（No06・No07）でも見たように、前庭の葡萄棚の下に露地に厚布・絨毯等の敷物を敷き、坐座にして客を迎え家族の休息用にすが、正にこれと同じもの否より大規模でしかも整ったものが宿舎にあった。これは坐ることだけでなく寝ることにも使う。夜起きたとき従業員等が寝ているのを見てこのことを確認した。ただ、これに近い生活は以前の日本の日本の夏にも見られたもので、日・維阿民族の生活習慣の近さを痛感したことであった。

17： この仕様及び使用状態（起居様式）は、木陰の場所に柔土に厚布又は絨毯を敷いて座を作りその上に直接座ったり寝そべったりするもので、椅子などを出したり等はしない。ハルピンの日本館でまた長春への火車の中で“漢族は四六時中椅子に坐る、坐っていても疲れず平気だ”という話を聞いたが、日本人としては自分の民族を含め「民族により空間の仕様と使用状況が違うものだ」ということを痛感するとともに、「同様の仕事をすする民族は細かいところまでかくもよく似ているものだ」と思った。

18： カシュガルの色満ホテルでも、主屋と別なパビリオンで民族舞踊が供された。客はその踊りを見物の中から見ようになっているが、

踊っているところは庭の芝生の中であった。トゥルファンと言いカシユガルと言い空間の様式が同じであるが、これは一つの定式となっていることを示しているように思われる。仕様は、平面は直土の上に布の敷物を敷き、立面は前面移動可能な簡易椅子・背面樹垣の上に布幕・両側面は樹垣、天井は葡萄棚というような構成になっている

20：三蔵法師が何か月か泊まったと言われるこの廃寺は日干し煉瓦（アドベ）で造られており、中に僧の泊まったと思われる建物や部屋があり、その他講義（法論）をしたところや礼拝をしたと思われような所がある。が、痛みがひどくよろろず定かには分からない。

21：満族の字を書いた石板有り、細直字体日本とよく似る。文化的に関係するか。

22：数千基に上る古墳群の見学用バス発着所近くにある「火州工芸書画店」と名付けられた店で、見学者のためのお休み處を兼ねている。この模様は店でよく分らないが、庭は葡萄棚の下に囑託が設けられており、この地域の特色を示している。

この古墳は現在余り守られているようには見えない。北京の故宮や呼和浩特のジュルチンの塔等もやはりあまりよく守られているようには見えないが、このものも合わせ現代の中国人特に当業者の文化財に対する考え・世界観・モーニングの仕方（鎮魂の）、デザインやその方向に対する考え等を知ることが出来た。

住宅觀察用參考施設屬性別一覽表 … ▼印 … (後期行程分ノ2) [ -烏尔木齊<sup>10</sup> -吐魯番<sup>10</sup> -ウズベキスタン -喀什<sup>10</sup> ]

番 号	地 区	居住團	住 区	階 級	業 種	民 族	施 設 型	施 設 形	構 造	屋 根 形	屋 根 材	窓 型	空 間 型	室 内 仕 様
	華西北 中西東 南西北	大中村 都都 市市落	市郊農 內外村	勞中農 働問業 者層者	勞職農 務務牧 種種種	漢 族	伝巫巫近 統旧新代 型型型型	囲丸一長 い 字方 形形形形	柴組横一 皮横架体 式式式式	立寄切陸 雜棟妻屋 形形形根	草布瓦新 葺皮石建 葺葺葺材	丸稍普稍広 天小中大 窓窓窓窓	草土上 土間床 敷鋪座	床壁天井 敷掛 格 否否 否
75	西 部	加 <sub>1</sub> 村	郊 外	不明(地方政府)	職業 <sup>23</sup> 日報 <sup>23</sup>	維 族	(立派最美) 文化財	前面一子軒平暖門 本館ト一風四柱型	煉瓦造	中心ト一風四柱型	ト一ム:タイ木	柱間小窓	坐座式 <sup>23</sup>	敷 <sup>23</sup> 徴 <sup>23</sup>
76	西 部	加 <sub>1</sub> 村	郊 外	不明(地方政府)	24 職業 <sup>24</sup> 日報 <sup>24</sup>	維 族	○ <sup>24</sup> 文化財	日替型(火型) 24	石(瓦葺)造	24	不 明	柱窓小窓 <sup>24</sup>	坐座式 <sup>24</sup>	24 設備 <sup>24</sup> の備り
77	西 部	加 <sub>1</sub> 村	市 内	不明(地方政府)	職業 <sup>25</sup> 日報 <sup>25</sup>	維 族	(旧寺建築的) 文化財	前面一子軒平暖門 本館ト一風四柱型	煉瓦造	中心ト一風四柱型	ト一ム:タイ木	柱間小窓	坐座式 <sup>25</sup>	敷 <sup>25</sup> 徴 <sup>25</sup>
78	西 部	加 <sub>1</sub> 村	市 中心	前江人職 業市場	26 諸種物品 販売市場	維 族主	中央 <sup>26</sup> の スク型 <sup>26</sup>	中央 <sup>26</sup> の 柱型 <sup>26</sup>	木 <sup>26</sup> の 柱 <sup>26</sup>	片流 れ	布・板・他	開 放 型	立 位 式	土 品 <sup>26</sup>
79	西 部	加 <sub>1</sub> 村	市 中心	商業階級	民族商場主に維 族	維 族	外來客用 3階建	3階建	R C造	陸 屋 根	不 明	当 面 <sup>27</sup>	立 位 式	純 品 <sup>27</sup> 無 <sup>27</sup>
80	西 部	加 <sub>1</sub> 村	市 内	中間層 <sup>28</sup> ホテル経営者	28 ホテル別 業民族経営者	維 族	28 庭垣 型型	庭垣 型型	28 柱(柱)造	屋 根 無 し	28 無 し	前 面 <sup>28</sup> の 窓 <sup>28</sup>	立 位	敷 <sup>28</sup> 樹 <sup>28</sup> 空 <sup>28</sup>
81	西 部	加 <sub>1</sub> 村	市 中心	回教徒	職業 <sup>29</sup> 日報 <sup>29</sup>	維 族	29 現在 使用	前面一子軒平暖門 本館ト一風四柱型	煉瓦造	中心ト一風四柱型	ト一ム:タイ木	柱間小窓 <sup>29</sup>	坐座式 <sup>29</sup>	敷 <sup>29</sup> 徴 <sup>29</sup>

82	西部	カシガル	市中心	工人階級	職能言語 <sup>20</sup> 土維族	市中ビル	縫製織物 <sup>20</sup> 木金工場型 R C 造	陸屋根	不明	動物調度 <sup>20</sup>	立位 <sup>20</sup> 混塗 無
83	西部	カシガル	市中心	住民	職能言語 <sup>21</sup> 維族	住居地区 街路界限 <sup>21</sup>	歩道有り 矩折直線	柔石舗装 <sup>21</sup> 屋根無し	屋根無し	窓無し	立位 <sup>21</sup> 石 <sup>21</sup>
84	西部	カシガル	市中心	全階級	職能言語 <sup>22</sup> 維族	中庭の配置 植室(格調)	煉瓦造	陸屋根	不明	民族的広窓 <sup>22</sup> 椅子座	立位 <sup>22</sup> 上置 石 <sup>22</sup>

(注)

- 23: カシガルの王族のモスクで非常に美しい。前面にイスラム流アーチを割り抜いた花模様付いた厚板型門があり、四方に高い塔がある。ただこの塔は整形に四隅に置かれておらず、乱に置かれている。この乱の法則は見学が短時間であったため見抜けなかった。後の機会を待ちたい。外廊の天井及び内部の敷物や壁・天井等は素晴らしい仕様・デザインで、維族の作品中最も美しいもの一つといえてよいであろう。このモスクの見学により、この地の回教徒維族の技術・世界観・デザインの特徴・方向等を知ることが出来た。
- 24: 上述23の王族の墓で緑色の貴石で出来ている。形は回教特有の断面火炎型の細長い棺で、多くの人の棺がこの同じ領域に安置されており、その方向は入り口に頭が向くような同じ配置になっている。このためこれを見た人は一種の感慨をもつような心理装置になっている。この棺群の中に、王昭君の場合とは逆に中国本土の皇帝に嫁に遣らされて非運のうちに亡くなった王女の棺が、一際美しく悲しさを誘うように安置されていたのが目立った。この墓の覆屋は普通のモスクと同じ形をしており、その外壁には透き通るような緑色のタイルが使用されていた。それは立派なものであるが、この材料選及びデザインの方向を見ると、どこか日本のそれに通じているように思われるのである。この地の回教徒維族の死についての考え・世界観・モーニングの仕方(鎮魂)・デザインの特徵・方向を知ることが出来た。
- 25: 市の中央市場から余り遠くない所にある。外廊に日本では縁か小窓に当たる禾本科植物の織維で作った敷物が敷かれていた。暑い土地という面と大衆の礼拝所という面をこのことで知り得た。外門を入ると広い公園があり、これを過ぎてこの礼拝モスクに至る。このような広い公園を外庭にもちモスクとしても良好な条件を備えるが、現在の市民にとってもよい休安所になっている。現在建てられているモスクは道の傍に作られているようであるが、このような公園を含んだものは恐らく昔だから出来たのであろう。考えさせられることが多い。
- 26: この新疆地方から西トルキスタンやアラブそれにインド等の地域では、町の中心に非常に込み合った市場をつくる。中東ではスークと言っているが何でも買えるところで、旅行者は時々掘出し物をする。この市場が成立出来るのは、シルクロードのような物質集散ルート・対象ルートをあつたからであろう。これもあるいは滅びの方向にあるのかもれない。深いところから研究して益々の発展の方策を練りたい。
- 27: 中の屏風や焼物・絵画等が素晴らしい。特に屏風は金紙生地の上に花木と孔雀が描かれているが、光琳の梅に畫の絵柄にも似て素晴らしい

ものであった。とともに、この地域と日本とが美意識の点で同質であり、繋がっているのではないかという感を益々強くもったのである。

28： トゥルファンンの宿舎にもこの舞踊場があり、国連の大使や等が見に来ていたことは前に述べたが、カシュガルの宿舎色満ホテルでも別館の庭で民族踊りを見せていた。作りはより余程小型であり踊りも地味であるが、変わっているのはホテルのペランダから見ることが出来るということであった。この形があるいは本来の形かも知れない。

29： 中央広場に面する大きなモスクで形は他のものと同様である。

30： 縫い事・刺繍・織物・特に絨毯織り・木工・金工等が行なわれ、この地域の特産品の伝統を維持している。小さい刀や楽器が面白かった。

31： 幼稚園の近くの居住区で、殆どウィーグル人だという。子供が多く歩道に坐って遊んだり家の扉の闕に腰掛けたりしてときを過ごしていた。が、ただ遊んでいるのではなく、中には長じた子は小さい子の面倒を見てやっていた。親の言い付けで荷運びや家畜追い・水運び等家の仕事を手伝っているものもあり、結構よい子であった。また若い娘さんなども水運びをしたりして働きものの一面を覗かせていた。以前の日本の農村にふんだんに見られた光景であるが、ここにはまだこのような健全な風景が残っているのであることを痛感した。

32： まだいたいけな幼稚園児が何とブレイグなことか。きちんと決まって数々の尾度りをんこなす。対にはカシュガルの女というのまで踊った。余程上手い(よい)子供達の集団かとお思いきや、これらの子供は2流・3流で上手な子たちは卒園して出て行ってしまったのだそうである。踊り場、それはお客さんを“もてなす(饗なす)”ところでもあるが、上流の住宅及び公共のところにあっと思われこの空間が、この幼稚園にもあり、子供達が実践を兼ねてこれらを使えることに興味をもったとともに、踊りの教えが実際の社会活動の中で生かされながら錬磨されているシステムを見て、その教育方針に驚異の目を見張らざるを得なかった。

住宅観察用参考施設属性別一覧表 …… ▼印

地区	居住圏	住区	階級	業種	民族	施設型	施設形	構造	屋根形	屋根材	窓	型	空間型	室内仕様
番 号	華西北 中西東 南西北	大中村 都都 市市落 内外村	郊農 勤間業 者層者	勞中農 務務牧 種種種	漢 族	伝垂垂近 統旧新代 型型型型	囲丸一長 い 字方 形形形形	柴組横一 皮積架体 式式式式	立寄切陸 錐棟妻屋 形形形根	草布瓦新 葦皮石建 葦葦葦材	丸稍普稍広 天小中大大 窓窓窓窓窓	草土上 土間床 敷舗座	草土上 土間床 敷舗座	床壁天井 敷掛 格 否否 否
85	東北	ハルビン	市中心	文化財	滿族か	五層階級都市型2階長方形		木造	入り母屋 蒙階屋根型	瓦○ 黄金色瓦	柱間板扉式	坐座式	坐座式	敷敷 蓋
86	東北	ハルビン	江南	自治林業	臨江公園 (現宮前公園)	広場と記念碑空日鐘 浴所水林休屋型	石造RC造		屋根無し	屋根無し	開放	開放	坐式自由	舗無
87	東北	ハルビン	市北部	自治林業	現在民	林内公園 (含新都市管理区)	近代自然空日鐘 森林浴歩林心型	自然山木土石間木 縁地園遊遊	屋根無し	屋根無し	開放	開放	坐式自由	舗無
88	東北	ハルビン	市中心	故勢力	ロシア 日本	諸目的旅行使用 現露教公田日露近地	煉瓦造 RC造		尖頭型 陸屋根	トタン? 不明	開放	開放	椅子座 立位式	木土飾 不明
89	東北	ハルビン	市中心部	現経営者 (故勢力)	映画街等 日本	諸種用途並ぶ併 市中心商業街	主に煉瓦造頂上寄棟他 (RC造も)(陸屋根も)		色々 諸位	比較的広窓			椅子座	木土飾 不明
90	東北	ハルビン	市中心部	現経営者 (故勢力)	日本	市中心商業街	近代構法か (不明)		(不明)	(不明)			椅子座	敷敷 飾
91	東北	ハルビン	市中心	地方政府	不明(混合民族)	近代社会主義 土特産品売場所	階下階上型 2階型商場	RC造	不明 (陸屋根か)	(不明)	比較的広窓	比較的広窓	立椅子	敷品 無

92	東北	長春	市内	地方政府	商場	不明	？	社会主义型支店 土特産品売場	1階型商場	不明(不明)	不明	不明	明	明	明	明	明	立椅坐	立椅坐	数品	不明	
93	東北	長春	市内	地方政府	以ストゥ	不明	？	社会主义型 接客業事務所	高層付層型 事務所	不明(不明)	不明	立椅坐	立椅坐	数品	不明							
94	東北	長春	市中心	地方政府	旧関東軍司令部 現共産党事務所	日本	日本	旧日本軍事務所 現共産党事務所	日本式様型 3階高層型	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
95	東北	長春	市中心	地方政府	旧関東軍司令部 警察司令部	日本	日本	旧日本軍事務所 現知事事務所	3階高層型 3階高層型	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
96	東北	長春	市中心	地方政府	旧警察署 長春駅及長春	日本	日本	都市計画 現警察署	新式高層型 ロータリー高層型	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
97	東北	長春	市郊外	地方政府	高層住宅	諸族	不明	近代型	5階連続型	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
98	東北	長春	市郊外	地方政府	低層住宅	日本	日本	近代型	2階連続型	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
99	東北	長春	市東端	地方政府	民族館	諸族	不明	民族近代型	2層高層型	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
100	東北	長春	市郊外	地方政府	VIP事務所	不明	不明	民族近代型	2層高層型	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
101	東北	瀋陽	市内	地方政府	以ストゥ	不明	？	民族近代型	近代型	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明

102	東北	瀋陽	市中心	商人團體	諸種物品 販売市場	不明	スーク型に 近似的に近いが違う	直線型	種・色・加幅	片流れ	布・板・他	開放型	立位	土品	幕
103	東北	瀋陽	市内	地方政府	漢宮宮内物産所	満族	磁器類の産地	木造	切妻(講式)	瓦葺き	唐戸(開型)	今立位 (普通型)	(数端う)	不明	不明
104	東北	瀋陽	市郊外	地方政府	高層住宅	諸族	近代型	5階連続型	陸屋根	不明	普通中型窓	不明	不明	不明	不明
105	東北	瀋陽	市郊外	地方政府	低層住宅	日本	昭和前期の産地	煉瓦造	寄棟	不明	不明	(講式) 不明(略台)	数絵	加工	不明
106	華北	北京	市郊外	地方政府	公園種文化財	満族	蔵の産地	池と回廊 平家長廊下23階	切妻寄棟	瓦葺き	全面開放型 唐戸開放型	立位椅位 不明機有	舗無	敷	不明
107	華北	北京	市郊外	地方政府	文化財	満族	蔵の産地	切妻寄棟	入母屋	瓦葺き	唐戸開放型	(略台)	不明	不明	不明
108	華北	北京	市郊外	ホテル	四海賓館	漢族	蔵の産地	R C造	陸屋根	不明	普通の中窓	椅子座	数	不明	不明

住宅観察用参考施設属性別一覧表 ……▼印

番 号	地区	居住圏	住区	階級	業種	民族	施設型	施設形	構造	屋根形	屋根材	窓型	空間型	室内仕様
109	華西北 中西東 南西北	大中村 都市落	市郊農 内外村	勞中農 働間業 者層者	勞職農 務務牧 種種種	漢 族	伝垂垂近 統旧新代 型型型型	囲丸一長 い 字方 形形形形	柴組横一 皮積架体 式式式式	立寄切陸 錐棟葦屋 形形形根	草布瓦新 葦皮石建 葦葦葦材	丸稍稍稍 天小中大 窓窓窓窓	草土上 土間床 敷舗座	床壁天井 敷掛 格 否否 否
110	北 部	呼 和 浩 特 市	市 内	ホ テ ル	食 堂	蒙 古 族	近 代 化	一 般 の 木 造 建 築 （RC 建 築 材） （RC 建 築 材） 木 造 内 装	外 窓 面 無 し （RC 建 築 材） （RC 建 築 材） 木 造 内 装	（ 懸 け 入 り の 形 ） （ 懸 け 入 り の 形 ） （ 懸 け 入 り の 形 ）	（ 懸 け 入 り の 形 ） （ 懸 け 入 り の 形 ） （ 懸 け 入 り の 形 ）	（ 懸 け 入 り の 形 ） （ 懸 け 入 り の 形 ） （ 懸 け 入 り の 形 ）	芝 生 鋪 設 芝 生 鋪 設 芝 生 鋪 設	芝 生 鋪 設 芝 生 鋪 設 芝 生 鋪 設
111	北 部	呼 和 浩 特 市	農 村	白 馬	包 他 展 示 地 区	蒙 古	古 来 包	丸 形 包 列 型 密 集 形	（ 柴 皮 式 ）	（ 丸 形 ）	（ 布 皮 葺 き ）	（ 懸 け 入 り の 形 ） （ 懸 け 入 り の 形 ） （ 懸 け 入 り の 形 ）	（ 懸 け 入 り の 形 ） （ 懸 け 入 り の 形 ） （ 懸 け 入 り の 形 ）	空 空 空
112	北 部	呼 和 浩 特 市	農 村	白 馬	積 石 塔 他 觀 光 地 区	蒙 古	古 来 積 石 塔 丘 上 忽 立 型	塚 台 彌 禮 塚 台 彌 禮	乱 石 積 式	円 錐 形 頂 輪 形 台	（ 石 表 面 ）	（ 懸 け 入 り の 形 ） （ 懸 け 入 り の 形 ） （ 懸 け 入 り の 形 ）	天 蓋 美 麗 繪 美 麗 敷 物 美 麗	天 蓋 美 麗 繪 美 麗 敷 物 美 麗
113	北 部	呼 和 浩 特 市	市 内	勤 勞	体 育 館	蒙 古	近 代 施 設	横 長 長 方 形 横 長 長 方 形	木 造	陸 屋 根	不 明	大 型 窓	立 位	無
114	北 部	呼 和 浩 特 市	市 内	勤 勞	文 教 施 設	蒙 古	塚 台 彌 禮	横 長 長 方 形 横 長 長 方 形	木 造	入 り 母 屋	瓦 葺 き	唐 戸 開 放 型	（ 坐 位 ）	瓦 葺 き
115	北 部	呼 和 浩 特 市	市 内	旧 市 住 民	114 年 代 住 居 街	蒙 古	蒙 古 の 伝 統 町 屋	通 路 に 平 入 り	木 造	切 妻 流 造	瓦 葺 き	棧 戸 開 放 型	（ 坐 位 ）	瓦 葺 き

116	北	部	呼	和	浩	特	南	西	稍	離	歴	史	的	郊	外	仏	教	塔	康	慎	仏	塔	型	八角	七	重	疑	か	八角	錐	型	瓦	葺	き	小	竈	以	外	無	立	位	面	加	工	研	仏	像	？
-----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

○ 以前“住居であったもの”の見学・・・▲印

住宅地（上述の住宅；住宅。がある住宅団地）を見学。  
市街地（朝食は家族全員路上外食，屋は家に帰ってまたは  
職場で食べるという，ただし路上の清潔度は疑問）

(注) 1： デザインは疑問？

あれが中国の代表の建築・建築家か？

地域の人に合っていないのでは，でもあれが中国式なのか？

2： 中国人のセンスを知る事が出来るか

3： 回教徒のセンスを知る

4： 回教徒の住宅概念の一部を知る

5： 鮮卑等の空間・シンボルに対するセンスを知る。

鬼太鼓打ち図ここにありものは，後満州国皇帝椅子前置き敷物の図柄中にも認めた。

またこれは，群馬県一の宮貫前神社最上階の窓脇絵柄・俵屋宗達の絵柄にも認められるものである。

6： 馬を記念した塔，往昔の現地人が如何に馬を大事にしたかが分かる。当時は馬は，さばく生活ではなくてはならぬものであるが，死活を制する手段でもあった。それで，人々は旅の平穩，往来の平穩を祈念してこのような塔を建てた。数えると全部で7層であるのも興味を引くが，それが六角であり上に宝篋印塔状の頭柱が付くなど，祈念建築物としてのデザインが面白い。これにより，現地人のモニョメンタルなシンボル空間に対するセンスを知ることが出来る

7： 材料は色から見て煉瓦と思われるが，他の材料例えば瓦であるかは不明。

8： ここでは諸種族の住宅の他，居酒屋等各種商業建築・官庁建築・城壁・城廓・祈念塔・祈念碑等の復元模型を見ることが出来、それらに関わる諸民族の空間の造り方，空間に対する計画の仕方やデザイン・センスの方向を知ることが出来た

9： この映画スタジオ村においては，構造は煉瓦造（軋造も）石造等の組積造・木造・左の混合，屋根形は立錐形・片流れ・切妻・寄棟・方形・入り母屋・陸屋根等の各種形態，屋根材も草屋根・土置き屋根・瓦屋根・他の各種葺材，窓型も窓無し・小窓・中窓・大窓等の各種窓型，坐位も立位・椅子座坐位・座坐位（座敷座坐位）等各種の坐位，室内仕様（塔等では室外仕様）も床の素土・加工土表・舗装・敷物敷き表・

板敷き装束等の、壁面の仕様も素土・素壁土・中仕上げ壁・上仕上げ壁・素絵掛け・額装絵掛け・額装字掛け・軸装字掛け等の、天井の仕様も平天井・仕様天井（この中に梁現し・格天井等も入る）・素木天井・加工天井（彩色絵や彫刻等）・等の各種仕様が存在する。これは、これらの建物を造り出す時代・各種民族・その思潮等によって異なってくると思われるが、それらの建物施設を支配出来る人達の階級・職業・趣味・等によっても大きく影響されて来たものと考えられる。

この、官庁・城・壁・商店・住宅・等の復元模型を見、それらの民族の空間の造り方や空間に対するセンスを幾分か知る事が出来た。ただ、この城廓内は諸民族が軒隣に住んでいるというよう人工の措置にも見られるように、後で作った趾があり生活状況の考証も精緻とは言えない面も見え、諸民族の住宅正面・屋根型・窓型・内部・等の形態・仕様・デザイン等で一部参考にする事が出来るものがあるにしても、全体としては生活様式研究の参考にするには少々難がある資料であることを感ずる

10: この地域は、維族つまりウイグル族が居住の主要民族になっている地域である。が、その他にハザック族やウズベック族等十に余る少数民族諸種族の居住の要因、それに最近著しい増加の傾向を見させている漢族等の要因も重なって、この地の文化的主導権が住民族のウイグル族にないよう見える。このためか同じウイグル族の都市トゥルファアンやカシュガルに比べ、ウルムチの表情は個々単体の建築物にしても設置物にしたも、將又集合体の地区・地域や都市にしても、何か表情が薄くつまらぬように感じられた

因みに、ウイグル（族）は中国では書物等に漢字で“維吾爾（族）”，略して“維（族）”と書き表している。‘爾’は簡体字で‘尔’と書くことが多い。この‘爾（尔）’の発音は [r] である

11: 地方の民族共和国へ行くと、葱の花の頭部を思わせる柱頭装飾の柱列を用いた会堂が造られる。蒙古の呼浩特でも同じ様式のものを見た。これには或る意味があり、それを与えたポーランドへの文化宮はその後不評で取り壊された。これは、ソ連内の文化宮（その一つがモスクワ大学）を模したものであるが、それらは現在ではソ連国内否直近のモスクワでも頗る不評であり、押し付けデザインが不適当なことを示している

12: この大会堂の中には、この自治区〔新疆維吾爾自治区〕の十程の地方中心（都市）のための部屋があるが、夫々その地方を構成する民族のデザインがなされていると言われている。椅子座位・座位等多面的になっていると思われる。これらのうちの幾つかの室内を覗いて見たが、豪華な飾りのある大きな椅子ややはり豪華な数物等がぼんやりと見えたが、細かなところはよくは分からなかった

気にかかったことは、この集まりが民族別でなく地域別ということである。これでは人々の発明性を萎縮せしめてしまおうであろう

13: 大会堂室内仕様は、床が磨かれた数石で出来ており客は滑らないように注意しなければならぬとか、壁は仕上げの壁面ですごろろ象徴的なものが飾られている。例えば、部屋の入り口のところにはその部屋がどの都市のものかを示す文字がデザイン的に示されているとか、食堂部と本館部の境のコーナーなどは彫刻的石膏デザインで飾られる等している。天井は高く明るくデザインされたとおり、照明なども良いものが灯されている。ただ、如何にも工業的前進とその産物としての内装を誇っている感じで、深い感動はえられなかった。

14: 食堂は、この自治区（ウイグル）のデザインの性向の性格を反映してか、食卓・テーブルクロス等は立派なものであり、床には明るい・上等な絨毯が敷かれ、壁面には象徴的な絵画が掲げられ、天井にはシャンデリアが下げられる等、豊かに立派に造られている。ただここで迎えてくれた責任者が、この元からの居住民族でなく又この部屋を飾る諸文物を生み出しデザインし飾り立てた民族でもない漢族の人であったのは、その人が優しい暖かい人であることは別に、何かチグハグさを感じさせられた。前述外観と内観の矛盾の問題も同じである

ここで食事をし、これがこの地方の今の権力者のデザインの意図・方向であろうと推察したが、現在の中国全土に瀰漫している民族的才能(タレント)の不足、その発展の阻害・萎縮・停滞等の因になっていることを知ることが出来たと考えている

- 15： 球形モスクの一つでドームは緑色タイル貼り、本体(本陣に相当する所)は石造・窓形半円形アーチ・前壁面三間分割・壁表面緑色タイル貼りの造りで、その回りに列柱式の外廊が回っている。内部は、立派な絨毯が敷き詰めであり、礼拝所としての格式を保っている。現在でも古い市民・商人等の礼拝用に機能している

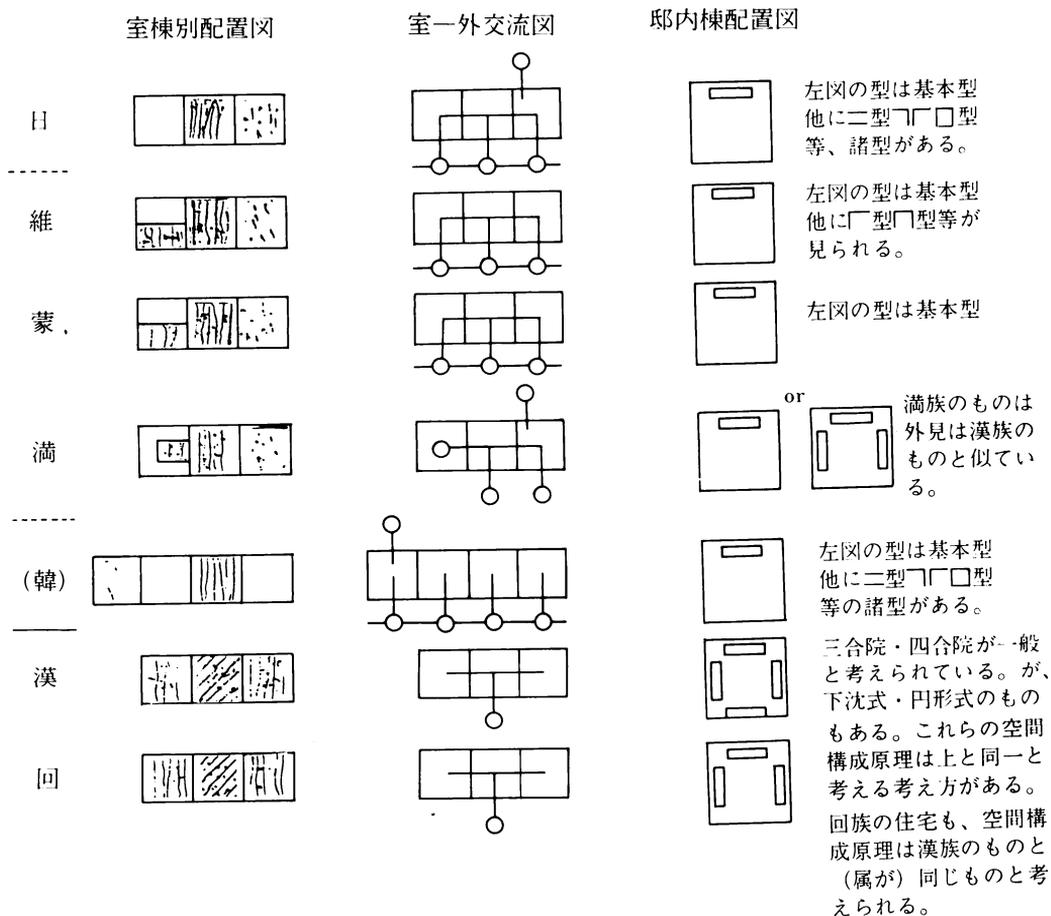
## V章 仮説の検証

本研究の仮説は「住宅(の文化)におけるアルタイの帯」の検証ということであった。この文面だけではこの内容がどのようなものであるか、それをどうの方法で検証するかということは、必ずしも明らかでない。筆者はそれを、住宅空間の諸属性を項目化し、その一つ一つについて相似(度)・相異(度)を検討し、それによって住宅が所属している母体(集団)の(文化的)類縁性を出して行くことであると解釈し、そのように実行したのである。

具体的には、日本住宅の研究で浮かび上がった問題点を韓国住宅の研究により明確化させ、更にそれをこの帯の住宅にぶつけて住宅の問題点は何かを検討する、という方法をとったのである。勿論、反対仮説として漢文化(系)との類似性の方が強いかも知れないということ置き、それとの対比で問題の追究を深めた。このようにして第IV章まで追究を行なって来たが、それを一覧にすると後に示す表のようになる。(表V-1、表V-2、図V-1)。

図V-1

### 住宅内空間構成及び室相互交流・室一外交流モデル図



表V-1

中国住宅民族別住宅内空間諸属性表

	民 族 名	日	維	蒙	滿	(韓)	漢	回	米英
間 取 り	床 上 座	○ 単	○ ・土	○ ・土	○ ・土	○ 単			
	土 座 <sub>1</sub>	○ 台・外	○ 庭			○ 庭			
	土 座 <sub>2</sub>	○ 板				○ 板			
	土 間	○	○	○	○	○ 板			
	舗 <sub>1</sub> 間						○ 硬	○ 硬	
	舗 <sub>2</sub> 間						○ 軟	○ 軟	
立 面 飾 り	腰 貼 巾								
	掛 布								
	掛 物								
	掛 軸	○ 床							
	掛 額 絵 画			○					
シン ボル	神 棚	○				(○)			
	仏 壇	○							
上 飾 り	欄 間	○			○				
	天 井	○			○				
室 接 面	窓・入り口	○	○	○	○	○			
	→ 庭 連 接								

表V-2

		日	維	蒙	滿	(韓)	漢	回	米英
入り口	戸型	○							
	扉型	○			○	○	○	○	
	外開き	○			○	○			
	内開き						○	○	
窓広さ	小						○		
	やや小							○	
	普通								
	やや広				○				
全面	○								
窓高さ	高い								
	普通						○	○	
	やや低い								
	低								
掃き出し	○				○				
天井	井状	竿縁	茸物模様 張幕模様						
	光源型	天井灯 吊灯							
	天井絵				○				
軒先	椽形	角		小丸	中丸	中丸	角		
	椽先	金物冠			同心絵	同心絵			
	椽模様			多重多色輪型 ジグザグ模様	多重多色輪型 ジグザグ模様	多重多色輪型 ジグザグ模様			
	置かれ方			放射型		放射型			

## ●表が示すもの（結果）

一覧表から読みとれることは、空間のとり方にしても、床・壁・天井等各空間の内部六面の物質的仕様のし方にしても、空間の扱い方(目的、方向づけ、空間相互の連繋、各室と外部との連なり、棟相互の配置、棟と外部(庭)との関係、等)にしても、更に空間の心理的な扱い方(家型・構え・各部シンボルデザイン・材料・色調等)にしても、維・蒙・満・鮮・韓・和等の帯の中の諸族の住宅は相似ないし類似の方向にあり、漢・回等の漢族系の住宅とは相異の方向にある、ということである。

勿論、問題によっては形式的に形態で追うと、このように遽かには言えない事項もある。例えば、三合院風・四合院風の棟の配置をとる満族の住宅棟配置や、炕様の床上座をとる維吾爾族・蒙古族・満族の住宅の上床形式、(軟)煉瓦を敷く維吾爾族・蒙古族・満族の住宅の高床座間の中の土間仕様、満族・蒙古族に窺える屋根頂の立ち上り棟のない丸棟造りや同じく入母屋瓦葺き造り、屋根の黄金色、木造、込み合い屋根式建築方式等は、漢族から伝えられ漢文化に属する、つまり漢族(系)住宅の特徴であるとする考えも生まれる(中國の多くの人がこのように主張していた)。

このような論調に対して少々の反論を加えるならば、三合院風・四合院風の棟配置の問題では、漢族とその他の民族の間にその棟配置自身に微妙な違いがあり、文化型として同型ということは断言できないといえる(例えば満族では縁線の交差のしかたの違い等がある)。更に重要なことは軒先(軒下)と窓・出入口口の取扱いのし方の違い、つまり室内と外部との連結の部分(ピヴォット空間)の取扱いに違いがあるということである。漢族はここをやや不連続的・遮断的に構成するが、満族はやや連続的・融合的に構成する。満族の場合軒を<sup>フタノキ</sup>2軒にして柱を立て、窓・出入口口は時には全開の形で大きく外部に(この場合は中庭に)、融合的に連結するのである。この中庭には松が植えられたり石が置かれたりするが、この石は溶岩細穴あき石等を用い、松とともにむしろ日本人が日本庭園に用いるものに近く、漢族のものとは微妙に異なっており、やはり同型とは言えない。

このように、ただ物質(棟・棟配置等)の物理的性格(三合院風囲い・四合院風囲い等)だけでは空間の似・否は論ぜられない。これは、全体のまとまり・連結のまとまり、つまり空間の醸し出す雰囲気・味わい等をも見なければならぬということにつながる。このことを明らかにするためには、研究の方法を変える必要も生ずるのではないか。つまり、生活追究・文化追究のための図面を採るが、それを従来の概形追究(図面認識においては1/100縮尺の図の認識の程度)の段階に止めず、必要なより細部の内容(1/50以上の詳細図をとり詳細の聞きとりもする等)をとる必要がある。しかも、一部分だけでなく必要な全部分を取り、それを全体(室や棟や邸)にまとめあげ、全体として見るということをしなければならぬと考えられるのである。私は、研究方法をこのように考え行なって来たつもりである。その結果、上の結論を得たと考えている。

## VI 文化の考察

### ●文化的考察の必要

前章で住宅空間の問題(相似・相異・類似・底在等の問題)を追究するには、その形態・材質・仕様(施工)等の物質面の追究が必要であるが、更に空間のまとまり・デザイン・潜意図、空間群のまとまり・デザイン・意図等にまで及んだ追究が必要ということ、つまり究極的には“感じ”や“雰囲気”や“味わい”、それに“思わく”や“潜意図”等に及ぶ研究が必要なことを意味する、ということ述べた。

### ●建築から文化への眼の転換の必要

本章では上述の見方の必要性を認める立場を容認し、文化の相似度の問題を扱うことにしたい。これは住宅をこえ、他の建築物や構築物へと考察の眼を拡げる必要があることを意味する。更にそれは、その他の文化物に、それら文物をつくり出す大本である“心”の問題にまで及ぶ方向をもっている。勿論、これまで入手した資料は少量であり、それを使った研究(本稿)だけでこの大きな問題を直ちに解決することは出来ないが、このような問題提起をし、或る部分これを証し、このような問題意識による研究のきっかけをつくるという意味では、意義があると考えている。因みに、住宅をこえた諸問題を项目的に以下に示しておこう。

- i) 他の建築物・構築物：宮殿(執務所)・廟・墓・神祠・仏閣・宗教建築(モスク・塔)・城館・市場・街・都市・庭・シンボル・等
- ii) その他の文化物：絵画・陶器・文字(カリグラフィ)・音楽・演劇・競技・娯楽・祭り・行事・儀式・食物・衣服・住居・什器等
- iii) 心の諸問題：清楚・簡美・華美・絢爛、気遣い・気配り・思いやり・個が利・情・合理、尚武・怯懦・仁義・利益、集団心・親方世界観・天与世界観・親戚重視社会観・ムラ重視社会観・儀礼的応待・歓待・応待、外来文化受入心・独自文化形成心、一人前・滅私奉公・忠・孝・礼・信・慈悲、死生観・他である。諸科学の専門の人々が考察すれば項目はもっと増えるであろうが、やがて空間の問題に関連ないし帰着・還元する問題は、大凡のところ上に示したもののようになろう。

表VI-1

i) 他の建築物・構築物

		日	維	蒙	滿	(韓)	〈漢〉	〈回〉	米英
建 築 施 設	宮 殿	乱込み屋根			乱込み屋根	乱込み屋根	整併行屋根		パレス
	廟				四角四方配置		?		
	墓	前方後円型			円 墳	円 墳	地 下 洞		
	神 祠	(依代物)			( <small>上二つ併せて 前方後円形</small> ) ( ? )	( ? )	( 碑 )		
		屋形覆せ形			?	?	?		
	仏 閣	入母屋 流れ造り		入母屋 流れ造り	入母屋 流れ造り	入母屋 流れ造り	入母屋 流れ造り		教 会
		(不 彩 色)		(赤 彩 色)	(赤 彩 色)	(赤 彩 色)	(赤 彩 色)		
		(木造瓦葺き)		(木造瓦葺き)	(木造瓦葺き)	(木造瓦葺き)	(木造瓦葺き)		
		(八 角 塔)			(八 角 塔)	?	(六 角 塔)		
	宗 教 建 築		中ドーム 四方柱						
		(全面アー チ)							
		(全面タイ ル張り)							
城 館	城壁上白壁			城壁上 壁	城壁上 壁	城壁 壁			
	瓦屋根御殿			瓦屋根御殿	瓦屋根御殿	瓦屋根御殿			
都 市 集 落	市 場	下 町	密集市場				疎集市場		ダウンタウン
	街	たまに側壁 ウダツの家		側壁ウダツ 出し	側壁ウダツ 出し	側壁ウダツ 出し	側壁ウダツ 出し		
				道方向 全開放	道方向 全開放	道方向 完全開放	道方向 不完全開放		
	都 市	中日出道路	不直道路	不直道路	不直道路	不直道路	井型●形道路		
	庭 園	山・川・池・ 自然・灌木・ コケ・石・ 橋・湖山水				(山・川・ 池・自然) 普通樹木	街路にエン ジュ小院子 に夾竹桃 (やや人工 的か)		低木 灌木 草花 芝生
	シ ン ボ ル	道祖神男				天上大將軍			
		道祖神女				地下女將軍			
	樹 木	松			松	松	槐		オーク
	(場所シンの ボルの)	樺							イーツァイ
	樹 木	桜				ムウシツ 樺	チユウナクイ 夾竹桃		(ユーフリー)
(賞でる代表)									

表VI-2

ii) その他の文化物

		日	韓	蒙	満	(韓)	<漢>	<回>	米英	
美術工芸	絵画	濃淡遠近法 等角投象法 細筆 黒絵・彩色絵 (白・赤・青・緑・黄)	濃淡遠近法 等角投象法 細筆 黒絵・彩色絵 (青・赤・緑・他)	濃淡遠近法 (濃淡遠近法) 等角投象法 細筆 黒絵・彩色絵 (青・赤・緑・他)			平並遠近なし   黒絵・彩色絵 (色々、色調異なる)		消点遠近法   多彩 (写真様)	
	陶器	肩いからず 円形 表面透明 白・色多彩 (柿右衛門白・赤)	肩いからず 卵円形 表面透明 緑青タイル (王モスクタイル、葵タイル)	肩いからず 卵円形 表面透明 薄青系色 (竹董品店展示壺類)	肩いやいかり 卵円形 表面透明 班紫色 (故宫展示品壺類)	肩いやいかり やや円形 表面透明 薄卵白色 (李朝白磁)	肩いかり やや円形  白地青彩 (西欧博物館展示品・他)		彩色華麗	
	文字	やや細長直勁 中心線流れ書き	やや細長直勁 中心線跳ね書き	やや細長直勁 中心線跳ね書き	やや細長直勁 中心線跳ね書き	やや細長直勁 中心線跳ね書き		四角四方筆重 左右幅線通し		横書き・ヒゲ文字・ヘンマンシッフ
	音楽	律・呂 (沖繩)・津軽ジョンガラ節		草原の音楽						ドレミ音階・ソロ・交響楽・オペラ
歌舞音曲・神事	演劇	歌舞伎・南方的か					京劇		シェークスピア劇 近代劇場劇	
	舞踊	手技・足技的か	手技・足技的か						バレエ	
	競技	神に捧げる 祭り集会用 (相撲) (ヤブサメ)		祭り集会用 (相撲) (馬術競技)		祭り集会用 (相撲)			オリンピックの技 球戯	
	娯楽	落語・万才・講談/寄席(口技)							舞踏場(自動) エンターテイナー(口技)	
	祭り	村祭り				トシエ洞祭			復活祭・ボンファイア・ハロウィン・クリスマス	
	行事	新年・村内挨拶まわり 盆・墓まいり		新年・村内挨拶まわり		新年・親類内挨拶まわり			上のものは行事でもある	

表VI-3

	日	維	蒙	滿	(韓)	(漢)	(回)	米英
食	素材生かす・生				素材生かす唐ガラシ味(韓・回風)	全て素材・加工の美、油味(中国食)		(フランス料理はあるが、イギリス・アメリカ食？)
衣	塩・酢・醤油の味付け(日本食)	布団寢室に積み重ね、	布団寢室に積み重ね、	?	布団寢室に積み重ね、	フトン寢台上に平延べ	フトン寢台上に平延べ	
住	前合せ・タレ首・帯・羽二重	布団寢室に積み重ね、布団地						
生活用具	踏坐・臥坐・座ぶとん			長ザブトン・山形背もたれ	長ザブトン・山形背もたれ			
起居様式(姿勢)	織細な外貌(カウンテナス)					野太い外貌(カウンテナス)		
生活様式	帯戸空間*1	色鏡戸空間			帯戸空間			
仕器	座坐式	座坐式	座坐式	座坐式	座坐式	腰掛け式	腰掛け式	腰掛け式
	外土座・草座・台座	外土座・草座・台座・舗瓦座	外?	外?	外土座・台座	外?	外?	
	内土間座・台座・縁側座・板座・畳座	内土間座・床上座	内土間座・床上座	内土間座・床上座	内土間座・板の間座・温床座	内舗石床・舗瓦床	内舗石床・舗瓦床	
	座敷供応机 <small>大</small> ・屏風(座づくり)	座敷供応机 <small>小</small> ・壁飾り(座づくり)	座敷供応机 <small>小</small> ・壁飾り(座づくり)	?	座敷供応机 <small>大</small> ・屏風(座づくり)	居間椅子・卓子	居間椅子・卓子	ソファ・椅子・テーブル・ベッド(丁寧上質のつくり、据え置き)
	足付き膳(食物出し)			(?)	足付き膳(食物出し)	盤盆(食物出し)		
	外便所便器					外便所		
	内便所便器							
	持込外廊置き					持込オマル室内		

(注) 1：日本住宅(特に四つ間取りといわれる住宅に顕著)の帯戸は、広枠・鏡板・中帯のある板戸で、表面上カンナ仕上げ(昔上チヨウナ仕上げ)でピカピカに磨かれていたが、より古い形式の住宅(広間型住宅・一列型住宅)では棚や建具が枠太・横方向強調模様につくられ、やはりピカピカに磨かれていた。ここは、村行事・家行事等の社会行事を行うところで、この磨き模様空間(帯戸空間と総称することにする)はその人と人とが結び合わさる社会結合行事のための背景をなす空間である。

この帯戸空間を他の民族で見れば、韓国の舎廊棟の舎廊房のマル(板の間)からの入り口の扉がある。これは6枚の連扉、ハネ上げ式・相互突き付け面になっており、扉の揃い面は日本の引違戸のように凸凹になっているのではなく平ら(ツライチ)である。新しい改良住宅でも、前広廊式マルから中の部屋(アンパンか)に入る戸は、このような磨き仕様になっていた。維吾爾族では、応接の間の後の板扉が綺麗に青色の明るく多色に光る彩色が施され、蒙古の賓館も一部がこのような類の栗色の仕様(より近代化されているが)になっていた。

表VI-4

iii) 心の諸問題(空間や諸物品のデザインをそうさせる基になる心理)

	日	維	蒙	満	韓	漢	回	米・英	
対 物 観 ・ 対 人 観 ・ 対 世 界 観	素材好き	不塗り			不塗り				
	透明好き	透明表面	透明表面	透面表面	透明表面	透明表面			
	尚武	尚武			尚武*2			愛スポーツ	
	寛恕	(不容恕)		(不容恕)	容恕	寛恕		理恕	
	功利	急利				功利		功利	
	仁儀	義理・人情 (但し内側 だけ)				儒教*3	仁義		
	集団化心	上あれば集 り得る (将校殺さ れと兵 達は烏合 の衆にな る) ↓ 上から都市計 画しなければ 無秩序に ボランティア の不成立    タテ社会・親 方主義・各自 独自無意見上 義*4無投票全 員一致主義				小中心の集 まり (親類での 強固な小 \集団化)		個が集まり 得る (将校殺さ れても、 兵中代役 \が出て処 (理 整然たる街 区・民主・鋪 石の都市計画 がある ボランティア の成立    ヨコ社会・代 表主義・各自 有意見主義・ 投票多数主義	
	上下心 (平等問題)	役員・職員 同食同服 (社員食堂・ 制服)							役員・職員 別食別服 (カンティーン・レスト ランの別、 各自服)
	世界観	成る世界観 王道世界観					天命世界観 革命世界観		人造世界観 革命世界観
	観内容	(門簡思考 式、全体 一致意見 への帰一 日本化仏 教への帰 (依					(無爲にし て化する 儒教・道 (教		(民主主義) 自由主義 博愛主義 (平等主義)
責 と 任 の 方	(最上者無 責任 中責者腹 (切り					(易姓・処 罰		(革命・処 罰)	

\* 2 : 満州朝の書に、日本人は尚武(廉潔)でわれわれ(満人)と同じような性質をもっており同類だ、と記している。  
 \* 3 : 韓国は儒教が盛んと言っているが、民俗心(=民族心)にそのような底流があり、紙の上の教えが来て習合したのではなからうか。西洋のキリスト教が、その基底に西洋原始心性がありその上に形としてヘブライの教えが流れあのような形になった(グリム)と考えられているように。日本の仏教も、その深底に日本人の心性を据えたものに変化して成り立ったと考えられる(各戸の仏壇、先祖位牌の安置とそれを仏として拝む等のこと)。また、戦前の新旧キリスト教・ロシア正教は基本性格のところでいわゆる神道化していた(村上重良氏説)。  
 \* 4 : 日本では、人が意見を持ちそれを吐くと「それはお前の個人の意見だろう」などと言われ、大勢の人の意見を集約しているのではないとされて価値の低いものとされてしまう。米英などでは「それで君は何を言おうとしているのか」と訊き、次の説明を待つ。そして、自分が反対の意見であっても「その点は僕も気付かなかった」とか、「そういうことは世界の誰もまだ言っていない(または証していない)、君が初めてだ」とか評し激励してくれる。

表Ⅵ-5

	日	維	蒙	滿	(韓)	漢	回	米・英
制 度 ・ 習 慣 ・ 社 会 構 成 原 理 力 観	制 度 (人材登用) 宮 中							
	女 性	妾 女*5						
	男 性	舎 人				宦 官		
	執 務							
	女 性	な し				な し		
	男 性	氏族・家柄 (寺院・大学)		(科 挙)*5	(科 挙)	科 挙		
	挨拶							
	呼びかけ	オイ、コラ、 モシモシ、ア ノといろいろ あり				ヨボセヨ (た まにヨボ一親 しい間柄)	ウエイ (こ の種の言葉 の数が少ない)	ハロー・ ヘイ・セイ
	交 流							
	一 般	天氣の挨拶 (コンニチワ)				相手の状態 (アンニョン ハシムニカ)	相手の状態 (ニイハオ)	相手の状態 (ハワユウ)
特 別 (格 別)	ヨゴト 明るい発展的 話題							
話 の 内 容	情緒的進行					理論的・契 約的進行		
社会 (構成) 観	最高位のもの 承認=公・上 (親方・天皇) 長 それに捧 げる→下され る*7 (掃一観・赤 子観)					最高位のもの承 認=天 (但、 非皇帝) 皇帝 (支配者) 天に そむけば次の 皇帝(易姓)に 革める(革命) 食わせる責任	支配者の承認 労働犠牲の就 労 対等契約の関 係 (非上下)	

(注) \* 5 : 妾女は婚姻の形ではなく被使用人であるが、地方の豪族から選ばれ物と人の組として宮中に送り込まれるもので、天皇氏と地方氏族との関係、権力構造を規定する一要因と考えられるものである。勿論、妃や嬪が在地有力豪族から出され、天皇氏はその上に乗って力を得て行った(例、桓武天皇秦氏)ことはあるが、これら女系で政治機構と権力の基礎構造を築くやり方は、キリウィナのやり方(B.マリノフスキーのトロブリアンド島の報告にあり)と似ている。

\* 6 : 清は漢人の地の占領後科挙の制度を取入れた(漢人融和策として)、漢満は世界観が違っていたのか、これ漢満非同一仮説の根拠の一つ。この種人材登用の方法と族員の心の平安との問題については、社会構成論の一つとして今後よりつめて研究する必要がある。

\* 7 : 自分が自分の分に応じて尽くせば(捧げれば)、言挙げ(要求)しなくとも最上位のもの(神=現代では社会全体と認識されているようであるが)から下されるもの(例オミゴク)として日常生活のあらゆるものがその時の(分に応じた)必要最少要量は得られるとする思想。日本では、しばしばこの神が天皇と一体として考えられた。

(注)※1：日本住宅(特に四つ間取りといわれる住宅に顕著)の帯戸は、広枠・鏡板・中帯のある板戸で、表面上カンナ仕上げ(昔上チョウナ仕上げ)をされた後手拭きでピカピカに磨かれていたが、より古い形式の住宅(広間型住宅・一列型住宅)では棚や建具が枠太・横方向強調模様につくられ、やはりピカピカに磨かれていた。ここは、村行事・家行事等の社会行事を行うところで、この磨き横方向強調鏡戸様模様空間(帯戸空間と総称することにする)は、その人と人が結び合わさる社会結合行事のための背景をなす空間である。

この帯戸空間の類が他の民族でもあるかを見れば、韓国の舎廊棟のマル(板の間)から舎廊房への入り口の扉がこのようになっている。これは6枚・ハネ上げ式になっており、かつ閉めたときに日本の引違い戸のように凸凹になっていないで平らになっている。新しい改良住宅でも、前広廊式マルから中の部屋(アンパンか)に入る戸は、このような磨き仕様になっていた。維吾爾族では、応接の間の後の板扉が奇麗に明るく多色に光る彩色が施され、蒙古の賓館も一部がこのような類の栗色に光る仕様(より近代化されているが)になっていた。

※2：満洲朝の書に日本人は尚武(廉潔)でわれわれ(満人)と同じ性質をもっており同類だ、と記されている。

※3：韓国は儒教が盛んと言っているが、はじめ民俗心(=民族心)に物事を四角に考える儒教様の思想の祖流があり、後に漢籍という紙の上の儒教の教えが来て、それが前のものに習合したのではなかろうか。西洋のキリスト教が、その基礎にキリスト教伝来以前から存在する西洋原始心性があり、その上に形としてヘブライの教えが流れ、あのような形になった(グリム)と考えられているように。日本の仏教も、その深底に日本人の心性を据えたもの(神道と源を同じくする心性)があり、仏教がその方向に変化した故成り立ったと考えられる(日本化仏教の世界観や各戸の仏壇・先祖位牌の安置とそれを仏として拝む等のこと。これらの中には本来の仏教では許されないものがある)。また戦前の新旧キリスト教・ロシア正教は、基本骨格のところでいわゆる神道化していたとする説がある(村上重良氏・他)。

※4：日本では、人が意見を持ちそれを吐くと「それはお前の個人の意見だろう」などと言われ、大勢の人の意見を集約しているのではないとされて価値の低いものとされてしまう。米・英などでは「それで君は何を言おうとしているのか」と次の説明を待つ。そして、自分が反対の意見であっても「その点は僕も気付かなかった」とか「そういうことは世界の誰もまだ言っていない(または証していない)君が初めてだ」とか評し激励してくれる。例として、ロンドン大学のサイムズやヒリアー、それにサンパウロ大学のワウフリード、の諸教授の、筆者に対する言がある。

※5：妾女は婚姻の形ではなく被使用人であるが、地方の豪族から選ばれ'物'と人の組として宮中に送り込まれるもので、天皇氏と地方氏族との関係、権力構造を規定する一要因と考を得て行ったが、これは中心の大首長が配下の各部族長の姉妹をその後子供に物がその部族から贈られる制度付きで娶るキリウイナの婚姻のやり方(B.マリノフスキーのトロブリアンド島の報告にあり)と似ている。

※6：清は漢人の地の占領後、自己の故地をも含めて科擧の制度を取り入れた。これは漢人融和策として行なわれたが、漢・満は世界観が違っていたのか。これは、満・漢非同一仮説の根柢の一つになりうるものと考えられる。この種人材登用の方法と族員の心の平安との問題については、社会構成論の一つとして今後よりつめて研究が行なわれる必要がある。

※7：自分が自分の分に応じて公に盡くせば(捧げれば)、言挙げ(要求)しなくとも、最上位のもの(神=現代では社会全体と認識しているようであるが)から下されもの(例オミゴク)として、日常生活のあらゆるものがその時の(分に応じた)必要最少要量は得られるとする思想。日本では、この神がしばしば天皇と一体として考えられて来た。

※8：日支同文等の問題、後述。

以上の評を見ると、住居空間の或る点(しかも起居様式や空間表現様式等基本的な要素)において、帯内諸民族の相似性・帯外(この場合漢系[漢族住居・回族住居])との相異性が検出されるとともに、i) 住宅以外の建築や構築物・設置物においても、いくつかの点において帯内の相似性・帯外との相異性が指摘できる。更に、ii) 建築・構築・設置以外の諸生活品・文化物品についても、いろいろの点で帯内の相似性・帯外との相異性が言えそうである。そしてその裏には、空間や物品をそのような形(デザイン)にさせている基になるある力があると考えられるのである。iii) 心の問題に関しても、味や気性やそれらに基づく嗜好性・習性・習慣・世界観等の点において、やはり帯内の相似性・帯外との相異性に気付く。これらは例えば、<sup>カラクワ</sup>洞竹割りの気性・淡白・商売上手・直情・思い込み押し付け・寛大・高度政治的・天への考え(世界観、実は人への考え[社会観])等の外貌をもってあらわれるが、その基にやはりii) で述べた底の力があるように思われる。これは一説では人間の脳で、新皮質的というよりも、旧皮質・古皮質的な(ところの)働きにより生まれるものと考えられるもので、教育や文化の伝播や移転等では変え難いと考えた方がよさそうな事柄であり、その基底も教育や伝播等文化移転によって変え得るというような説明では説明がつかかねるものということである。

実は、建築や物品(生活物品・文化物品)の形や色や味わい・雰囲気・シンボル性=表示性等の形・デザインを形づくる源は、やはり上述の脳旧皮質・古皮質的な作用と同じものから来ると考えられている。これは、これらをつくる時作用するばかりでなく、これらを使って習慣になるもの(例えば「座に坐る」とか「座にごろっと横になる」等)にも同様に作用する。つまりこれらは、情動・習慣固定化等を司る頑固な脳皮質作用に多分に依存してできた結果のものとして解釈できるということである。もしこのようであるとすれば、形・デザイン等の文化(物)の傾向、その下敷きになっている心、習慣になった生活形態・生活様式は、住宅空間形成、いやそればかりでなく生活形成従ってそれらの計画にとって『第一義的要素』に数えられなければならないではなからうか。ただ、このことは今回の研究では“問題提起”されたに過ぎず、これらの確証はこれからサンプル数の増加、帯外のより深い追究(漢系の特色の特定、南の帯<sub>5</sub>[複数か]の特徴の特定、漢系：南の帯：北の帯 相互間の相似性・相異性の同定・異定の検討)等により、更にはっきりしたものにして行かなければならない。

## 結章 まとめ・言えること

### ●今回の研究のそもそもの問題

そもそも、本研究は何のために始められたのであったか。それは、序章及びV章で述べたように、住宅・住居について“アルタイの帯”を確認する、ことができるかを証明することであった。しかし、何故“アルタイの帯”などを確かめる必要があったのか。

実はこのことの裏には、住宅計画・建築計画の底に横たわる空間的問題から文化的問題・心理的問題、更に哲学的問題にいたる解かねばならない基本的にしてかつ深刻な問題が、今の日本の学問・施策思想の中に潜んでいると考えられるからである。では、その問題とはどんな問題だったのであろうか。

それは簡単に言えば、間取りの問題では、日本の住宅・生活様式を例えば2DKや3LDK更に4・5LDK等のnLDKに向かうもの、イス・テーブル・ベット等を使うイス坐式起居様式に向かうものと認識・理解し、それを基本にしてこれからの住宅設計を行なったらよいまたはすべきだとする説が、世間ばかりでなく一部学界・官界等で一般化し唱えられ(唱制し)ているように見えるが、果してこれでよいのかという問題である。また都市や農村の自力建設の住宅では民衆はこれと異なる方向の間取りの住宅をつくっているが、これはこれからの住宅建設の方向としては間違っているのか、等の問いに答えることでもあった。

このように、学問的に出された“今後の間取り論”と“民衆の間取り傾向”の間には大きな差があるが、われわれはこのどちらを推したらよいのか。もし“民衆の間取りの傾向”が誤まりであるとするならばそのような方向に行かないよう民衆を説得しなければならないし、逆に“民衆の行く方向”に理があるとするならば“今後の間取り論”は更なる反省が必要とされることを民衆に代って主張しなければならないであろう。

一番問題なのは、前者の論の人達が唱えている「座敷＝格式空間論／近代式様式論」等であり、それは『座敷否定論』『椅子坐移行論』(＝近代化論)であった。座敷否定の理由の一つとして、座敷・床の間等の“座位決定能”が人の上下関係をもつくる、坐る式姿勢は封建時代の上下関係を固定化させる、非能率的・非衛生的でありすぐには立てないから、等というものが挙げられている。そして多くの場合、その基に儒教的起居様式があると説く。これらは実は学問的にはまだ証明されていない事柄である。だから、唱えられたときに即「果してそうか」という差異法的アンティテーゼが提供され“反対事例が探られ”真偽の検討吟味がなされなければならなかったものである。が、多くの人達がこの疑問も起こさずその検討も経ずにこれに賛意を示し、あとは一致法的な追証を出しただけであった。この追証で一番遺憾に思うのは、(主に農村の)住宅の「プライバシー室化論」「中廊化型論」「nLDK型論」である。住宅全部がこのような型のものになるとする論で、農村住宅改善指導の面ではすでに住宅側・住民側から一部で不満が出、中には実害が出ていると感じられているものもあるのである。

これらの問題の背後ないし基底に、(空間)計画についての考え方の問題、更に哲学の問題がある。科学的に得られた原理の応用、つまり“学問的産物の応用・利用・適用論”は、自然科学の中で特に合成(化学の部分)の中にとられている方法(考え方)であるが、建築計画学でもこれと同じような“部分法則の発見→適用による全体の構成をする形の計画論”が行われている。この底には、“こうすればよい結果が生まれるからこうする＝為るの思想”とい

う(自然的)主意主義が基調として流れていると見られる。これに対して現在、“民衆の中で実際に行なわれる実体を基本に全体を構成すべきである＝成る<sup>なる</sup>の思想”という、非主意主義的自然主義的行き方が唱えられている。この考えに立って前者の方法を見た場合、それは時として夢幻体と見えるのである。(ソ連・東欧等で行われた共産主義は一つの主意主義的計画型であった。そしてそれは、実際的には夢幻体であり、失敗であることが判明した。しかし、その失敗にいたる計画の構造は理論的にまだ証明されていない。これは、今後の計画学(広い意味の)が解明・証明しなければならないものではないか。)

この主意主義か自然主義かの問題を明らかにするためにも、本研究は基本的な資料を与えることになったと考えるが、この問題の余祿として“漢族の左右対称四合院風間取り好き”が、漢族の内的な力の一つの自然的な発露の形・社会的自力発揮型ではないか、という初歩的なしかし重大な仮説に到達したということを報告しておこう。もし、この型で、この住宅型で形成された家族中心的経営を基本にして社会を組めば、或は中國(といっても漢族社会のみを指す)は、生産も社会も文化も本来の伸長の姿を示すかも知れない、という“成る”の考えから見た(社会)計画仮説が成立し得る。家族の制度を古い制度とし、それとたたかう姿勢を変えていない中國当局の現状から見て、現実にはこの案はとり入れられないであろう。中國当局は、この意味で住宅の間取りの形としての三合院・四合院を取らないのではないか、いやむしろ排するのではないか、と考えられる。しかし、民衆はどうか、どう志向するかは、別に研究する必要があるのではないか。

※ : 本能・民族性・古皮質旧皮質的反応・習慣・習性等の優位、それから発展したものを基本とするの意と解釈することもできる。

#### ● 予備研究としてのブラジル日系人の住居の研究及び韓国住宅研究で分かったこと

日本の住宅は万国共通ともみえる nLDK の間取りではなく、“日本独自の型”をしているのではないかという「反 nLDK 論」、つまり“nLDK論”に対する「アンティテーゼ」は、サンプルが日本の住宅だけの場合孤立してその確証や確認の点で自信がもてなかった。

そこで、日本の人が移民して生れたブラジル日系人はどのように住宅に対して(生活的に)反応しているのか見ようと考えた。筆者がブラジルで見たものは、西欧的住居環境に囲まれている日系人の間の、ブラジルの伝統にはなかった床上座敷・上足・脱靴・膝つき生活、表空間見せ(裏空間見せず[ブラジル人は白人系も黒人系もともに、裏側の寝室・台所等もくまなく見せるのに])、室内整理下手、簡素直線(床の間様)好みとそのような空間の形成、等の傾向であった。

また、隣國韓国の住宅を見ることにした。留学生も来ていて前に幾分か分かってはいたが、実際に行って見ることにしたのである。そこで見たものは、日本住宅の丸写しではないが、何かとてもよく似ている、特に日本の南九州以南・その他の地域に見られる横一列型住宅の間取りに似ている生活空間であった。それを箇条的に次に記して見よう。

- ① 土間と板の間と紙敷間(温突間)の3種の床間からできている(日本の土間：板間：畳間に相当か)。
- ② この板の間と温突間は脱靴・上足・坐臥姿勢の生活様式の間である(日本でも板の間・畳間は脱靴)。
- ③ 板の間では敷物を敷きそこに人を招き入れるが、小机または小盆に茶菓を盛って出し

接待する(日本でも、板の間敷物招客・盆盛茶菓接待をする)。

- ④ 板の間は吹き抜けで梁組が見えるようになっており、木組・木材の表面は磨かれて光っている(日本でも以前は土間・板の間〔広間〕の天井は吹き抜け・梁見せ・梁化粧〔磨きも含む〕であった)。
- ⑤ 舎廊棟も、①と同様の3種の床間をもっているが、板の間と温突房(内棟に相当するところ、続き間になっている)の間の木の扉はピカピカに磨かれ、日本の住宅の中の間(板の間・広間)の帯戸のような様相を呈している。ただその納い方はハネ上げ式であるが(日本では、帯戸空間または太木柵古色磨き艶出し・背柵壁同様仕上げ)。
- ⑥ 内棟(母屋に相当)の内房と板の間は庭(中庭)と連繋して儀式・行事空間となる(日本でも板の間〔広間〕は集団待合強化的儀式空間として機能)。
- ⑦ 室(房と板の間)は中庭にむけて全面的(板の間)にまたは広く開けている、室の扉は外方開きである(日本では、土間と前、板の間と前庭、畳の間と前(園)庭が緊密につながっている)。
- ⑧ 最近の発展として、舎廊棟・内棟が直角L字型に接合された住宅が発達しているが、舎廊棟部分の板の間は日本住宅の広間(板の間)のように、それに続く房は日本住宅の2間続きの間のように、内棟の板の間は日本住宅の洋式居間のように、内房は夫婦の部屋兼家族の集りの部屋(坐り姿勢)のように、越房は老人その他の家族の部屋のようにつくられる(日本では、旧型の部分にザシキ、新補の部分にn LDK 様の空間がつくられる)。

以上、韓国住宅の特色及び傾向は、日本の住宅とピッタリ一致するとまでは行かないが、四つ間取り型及びその他の型の住宅空間構成部分にかなり合致するものを持っている。これにひきかえ、漢族の三合院・四合院の住宅は、すべて土足床であり床上座はなく、旧型部分の空間対応も新型部分の発展型対応もこれ程似ていない。

#### ●その他の諸問題の考察・試案：

- ・「四合院」等の左右対称型の住宅の入り口右ズレの問題について

漢族の住宅は「四合院」等が示すように左右対称の型になっている。何故このようになるのか。これらの問題は形の問題として扱われているが、このことだけではことの真の理解・深い理解に達することは難しいと考えられる。機能を超えて整形とを感じる形をとるという説明は理解できるとしても、ただその形が好きだから・色が好きだからというだけの理由では説明がつかない。より深い理由があると考えなければならないのではないか。

また入り口右に寄る問題にしても、例えば満族では土間一(土座・板の間)一床上座が横並びにとられ、入り口がその土間にとられるから偏ると言えるし、漢族では逆に子供達を内に平等に置いて一家(漢族式大家族)で経営に当たる形であり、その形が心理的に漢族にとって一番生活経営がし易い形・能率的な形だからと考えられる。更に、この形は漢族の無意識の社会観が空間にあらわれたものとも解釈できる。(日本の住宅空間構成が日本人の社会観〔現実には神・仏観の形をとるが〕を表わしていると考えられているのと同じように)。

このように、裏の事情をも考慮すると形がそのようになった理由が理解し易いのではなからうか。

(注)※：この形が中國人(漢族)が一番自然にとりたがり、生活経営としても或いは條件の下(きびしい條件・外からの公的援助の少ない状態(例えば台湾や江南の住居の例等))では一番能率や防禦の性能のよかった体制と考えられる。

・「昔同じ堅穴に住みながら現在何故このように異なって来たのか」の疑問について

現在の日中兩國の住宅間取りの相異を認めるが、昔同じ堅穴であったのに何故現在このように違って来ているのか、現在も同じであるべきではないかという説がある。この説は、中國(漢族)・日本(大和族)の文化の同根説の一種と考えられるものである。更にこれは、日本の人々の住宅空間要求は都市も農村も同じで、それはnLDKの方向に向いており、起居様式も椅子坐の方向に向かっているという説とも同類の関係にある。この説は、これまで日本の計画思想(住宅平面計画)の主流をなして来ていると考えられるものである。またこれは、生活の発展の過程、形式の万民(國・民族を問わず人間すべて)同根説またはより適した言い方では万国同基底説・同形要求説につながっていると考えられるものである。

しかしこれらは、今回の研究によってまた更に他例の考察を深めることによって、このようにはただちに言えないのではないかということが分かって来た、と仮説として言えるのではなからうか(このことについては、すでに何度も触れたので詳細省略)。もし、以上の仮説が正しいことが証されるなら、これらの裏にある思想としての様式主義・インターナショナリズム・中國源主義(文化伝播説と関連)・中國一円同質觀(民族の差別なく使用物品の形等[含デザイン]が一様に採用されると考える考え方)等は反省ないし見直しを迫られることになると考えられる。所謂科学的同定法による排地域的・非民族的・非國別的空間計画論及び生活計画論・その計画による満足論等も、顧省の必要に迫られると考えられる。この考えの基になっている“イス坐化=近代化論”等も同様であろう。

### ●これから、唱えるべきこと

- ・真の要求の発現の把握の必要→その把握は『民族主義』\*による方法が正着ではないかの仮説→日本文化論に(一部の)理があるかを問題にすること(今後の検討の必要の提唱)
- ・計画は深生活要求に基づいてなされるべきこと→食・寝分離論、それに連なる諸論等は深い考察なのかの反省の必要
- ・すでに民衆(民族)の中に芽生え形成成功したもの・その発展形(型)を計画の土台及び基礎要素にすべき(これまでの計画論は化学の合成論・機械の組立て論と同様ではないか、生物の新種育成(育種)の考えを参考にする必要はないかの検討必要)→歴史の尊重等の提唱
- ・ポストモダン要求にいたる人間心理(モダンにあきたらない人間心理)の深い理解=一つ概念にとらわれない(特に誤まった科学主義等にとらわれない)(バルト三國の問題やスローベニア・クロアチアの問題等も核心のところで理解し、研究対象になっている民族の問題をそのレベル、つまり生活・文化の面で捉え精査する)等の提唱

(注)※：但し偏狭な20世紀前半までの「我利的民族主義」ではない。深生活要求・文化要求・万民の相互扶助を基礎にした『真の民族主義』である。

〔断り〕

本論文は本来下記に示す章立てで発表する予定であったが、今回その全部を発表することができず上述のようになった。全文は他日何らかの方法で発表したいと考えている。

1991年9月9日 筆者。

記

序章：問題と仮説

問題は何か＝日本住宅のプロトタイプの特有性の隣接帯国住宅の型(近類型)による確認とこの近類型の底在型をアルタイ系(型)とする仮説(漢系はこれと別の意)。

I 章：調査の経過

日程表＝1991年7月24日から8月21日に至る中国調査で前期調査と後期調査に分かれているが、その表の揭示。

II 章：訪問の住宅

訪問住宅表＝中国の中部・南部・西部・北東部・北部諸地方の住宅の一覧表、部族的には漢・回・維・蒙・満・鮮の諸族の地域。

III 章：各戸の説明

戸別の説明＝附表の住宅諸元表並びに平面図を参照しながらの住宅の様子・同判明部分の詳細・生活・同詳細等の説明。

IV 章：住宅の分析

問題点の分析＝各戸の基礎条件と住宅・生活に現れた現象との関連分析、特に地域別・民族別にその特徴が現れるかに関心を至す。

V 章：仮説の検討

仮説の検定＝上掲の問題点つまり日本と隣接帯国の比較の原則に沿っての日本住宅の典型に備わる特徴点の隣接帯国の住宅に存在することの同定。

VI 章：文化の考察

文化相似度＝住宅・生活の相似の比較、その他の文化的特徴点の相似比較、芸術的完成・心理的対人観等に至るまでの相似性・異質性の検討。

結び：まとめ・言えること

唱制の確度＝今回の研究での漢・維・満・蒙・韓・日の資料だけでアルタイ系を言えるかの問題は後に残される、なお引き続いた研究が必要。これを以下に示す。

i) 中国南西部とそれに接続する地帯の研究(貴州省・雲南省・西藏越泰ネパール)。

ii) 維族連接地域＝トルコ族地域・同連接地域の追究。

iii) その他の対比民族地域の研究(太平洋地域)。

附章：住宅諸元と採図平面等＝ポリネシア・メラネシア・ミクロネシア・アイヌ・ツングース地域

住宅の資料＝住宅諸元別戸票(分かったもののみ記入)。

採図した平面図(採れたもののみ)。

住宅・生活の写真(撮れたものの一部)。